

科学図書館叢書

梅園叢書

三浦梅園著



科学図書館



梅園叢書

三浦梅園



# 目次

## 梅園叢書卷之上

一、詩を説て道に志す人に喩す	五
一、酒食欲の誠	五
一、生前死後の理	七
一、禍福は命なりといふ論	八
一、織田信長恩賞を賜ふ話	一〇
一、雨森彦太郎軍功を譲る事	一一
一、武田信玄の知言	一一
一、後世を願ふに心得違い多き事	一二
一、上たる人の心得下たる者の痛となる説	一二
一、怒の道の説	一三
一、物事に一得一失の理ありといふ説	一五
一、交際の道こころえあるべき事	一五
一、和歌を引て材芸ある人の箴を説	一六
一、人のあしきを捨よきを取といふ訓	一六

一、 継母と前家子との話	.....	一七
一、 盗人の名目種種あるといふ説	.....	一九
一、 村松喜兵衛の辞世	.....	二二
一、 技芸勝れたる人慎かたの事	.....	二二
一、 劣れる者は見わけやすく勝れたる者は見わけがたしといふ説	.....	二三
一、 臆負といふ言葉はいふまじきといふ説	.....	二三
一、 物の命をたつもまた助るの理ありといふ論	.....	二三
一、 学に志し芸に志す者の訓	.....	二五
一、 知ることは易く行ふことは難しといふ説	.....	二五
一、 よしとほむるもあしと殿るも必察すべしといふ説	.....	二六
梅園叢書卷之中		
一、 早分別に後悔多しといふ説	.....	二九
一、 理窟と道理との辨	.....	三〇
一、 分限相応こそ長久の術といふ説	.....	三一
一、 物に譬へて子たる者の教を説	.....	三三
一、 上たる者は下の邪正をよく察せよといふ説	.....	三四
一、 堂塔建立の説	.....	三六

一、おとし物したる主と拾たる者と曲直裁判の話	三七
一、物の性の辨	三七
一、仏舍利の辨	四六
一、誠といふの説	四六
一、碁将碁に遊ぶ人の箴	四九
一、書をよむは身を修るのためといふ説	四九
梅園叢書卷之下	
一、五行家の説害多しといふ論	五一
一、人の所長を択ふべき事	五四
一、吝嗇儉約の辨	五六
一、謙を守れとの説	五八
一、善人悪人盛衰夭寿の解	六一
一、陰悪必ず禍を蒙るの説	六五
一、分別なき者におぢよとの説	六五
一、忠臣国の為に命を惜みまた身をおしますといふ話	六六
一、医に望聞問切の四ツありといふ説	六八
一、医は仁の術といふ論	六八

一、美服珍膳世の弊を矯るの説	……	六九
一、米に讐へて五倫の道を喩す	……	七〇
一、施しをなしました施しを受るの心得	……	七三



## 梅園叢書卷之上

詩を説て道に志す人に喩す

詩曰。厭浥行露。豈不<sub>二</sub>夙夜<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>行多<sub>レ</sub>露<sub>一</sub>。まことに道に志ん人は、此詩を味ふべし。是は女子淫人をたつの言なりといへども、詩はその意ひろし。厭浥とうるほへる行のほとりの露繁ければ、夙におき夜におきて君に随ひたくは思へども、露にぬれん事の傷ましけれとて、おもひとどまりたるなり。人各聖人にあらざれば、情にひかれ慾に動されざるはなし。或は色により財により酒食により、あるひは憤怒により好樂により親愛による。されど是はかくはあるまじき事なりと、身の汚を露にぬるる如く、よくく道のあるべき所をもとめて、慾をとゞめんは、誠に君子の人なるべし。

### 酒食欲の誠

酒食欲の三、是人の太害といふべし。酒は少し呑ときは憂をはらひ鬱をひらき氣血を循環す。されど飲酒の人節をしらず。あくまでのみ狂走喧嘩などして宛も狂人にことならず。小にしては病を醸し、大にしては礼をうしなふ。むかし邵康節酒をこのむ。酒を名づけて太和湯といふ。只のんで微醺して止む。故にその詩に

性喜飲<sub>レ</sub>酒

飲喜<sub>二</sub>微<sub>一</sub>醜<sub>一</sub>

飲未<sub>二</sub>微<sub>一</sub>醜<sub>一</sub>

口先吟<sub>レ</sub>峨

吟峨不<sub>レ</sub>足

遂及<sub>二</sub>浩<sub>一</sub>歌<sub>一</sub>

浩歌不<sub>レ</sub>足

無<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>奈<sub>一</sub>何<sub>一</sub>

いふ心は、生質酒を好む、のむにやや酒気面にめぐる事をおぼえ、詩など朗詠してやむとなり。よく酒をのむの道を得たり。近き比松平伊豆守信綱は一時の賢君なりしが、ある夜咄の序、臣等酒の徳をのべ君にすすむ。信綱の宣けるは、汝等みな子あり、その子の悉く酒を呑ん事を願ふか、飲ざらん事を願ふかと有ければ、臣等暫く黙して居たりしが、子は酒を飲ざらんこそ親のこころやすく候へとこたへける。人の至て愛するは子なり。酒若美物ならば、豈子の呑む事をいとはんや。是千古の公論といふべし。上戸と下戸とは氣稟なり。酔と酔ざるとは節にするにあり。壮にして少艾をしたふ。人情の常なり。ひとり人のみならず、水にすむ鳥、山になく鹿も、皆その偶をもとむ。しかはあれど、人は義方のお

しえあり。媒をまたずしてめとり、牆をこへて処女をひく。人としもいはんや。是学者人徳工夫の第一也。花の顔春を妬み、柳の眉月を欺き、目に挑み心にひかば、鉄心忽融し鋭氣忽碎けん。故に氣千里をのみ、勢万人をとりひしぐも、ここに至つて過ぎるはすくなし。朱子も世上無<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>人慾險<sub>一</sub>。幾人到<sub>レ</sub>此誤<sub>二</sub>平生<sub>一</sub>とて自警玉へり。白樂天が詩に

狐<sub>レ</sub>仮<sub>二</sub>女妖<sub>一</sub>害猶淺

一朝一夕迷<sub>二</sub>人眼<sub>一</sub>

女為<sub>二</sub>狐媚<sub>一</sub>害即深

朝朝夕夕迷<sub>二</sub>人心<sub>一</sub>

といへり。学者心をとどめざるべけんや。安東省庵いへることあり。無<sub>レ</sub>求是至貴。知<sub>レ</sub>足是至富。安<sub>レ</sub>心是至樂。予其地にいたらずといへども、ふかく其言葉にふくす。身万乗の君となり、富四海を有てども、長生を欲し福田をもとめて身を勞し、終にその貴きことをしらず。近比太閤秀吉公は匹夫より起り、己に日本を掌握し、其心猶あきたらず。朝鮮をせめ明にいらんとす。天もし是に年をかし、且勝事を得さしめば、その心明にしてとどまらじ。一生何の日かあくことあらん。利にひかれ慾に動さるれば、富陶朱猗頓を欺き、貴きこと人の位を極ても、憂愁の地を離れず。故に富貴の外に富貴あり。樂の内に不樂あり。

### 生前死後の理

死生の説明ならず。ややもすれば異端の説にまよふ。予易を讀て原<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>反<sup>レ</sup>終といふにいたつて、豁然として悟る事あり。死しての後は生ざる前の如し。生ざる前吾しらず。死しての後吾いづくんぞしらん。むべなるかな聖人其しるべき所をもとめて、其知べからざる所をいわざる事を。かたへの人の曰、しからば人死して靈なし、祭祠も無用の事なるべし。曰然らず。人死して靈なしといふにあらず。又有といふにあらず。生ざる前しるべからず。死しての後吾何ぞ知ん。故に孔子も、未生をしらず何ぞ死を知んと宣り。火きえて尚煖なるものは。其氣存することあればなり。况人情已に死したりといひて、道行人にわかれたる如く、跡とふ事もなく打捨おかるべきや。是人情止事を得ざるよりおこれり。然る時にいたつて、吾心ありしむかしの事などつゞくに思ひ出られ、なき面影かく社有し、かくぞせしとおもひつづけて誠をつくし、祭る時その誠の心おほふべからず。鬼神感格洋洋乎として上にあるが如く、左右に在が如し。この境よく思ふべし。

### 禍福は命なりといふ論

世俗巫祝の道を信じ、災を得難に臨み病にかかるとの時、願を結びて仏神に祈る。是固に所謂なきにあらず。周公旦兄武王病にかかり給ひ、成王(武王の御子也)尚幼かりしかば、爪をきつて天にいのり給ひしとぞ。親兄或は君上の病をうる時、子となり弟になり臣となるもの、寢食する事能ず。いかんともすべからず。爰を以て天にいのり、鬼神にいのる。固に

この心かくの如くならざる事を得ず。我身に於てはしからず。太甲曰。天作孽猶可違。自作孽不可活といへり、不意にして孽にあふは、吾招く所にあらざれば、終には免るべし。又君をうらみ、父母兄長にさかひ、人を讒し人を殺し、あらゆる積悪誠に己より出たる者は、己に帰る習なり。或は酒にやぶれ色につかれ、吾天年を損す。みな自もとむる所なり。顧て身を悔べし。神にへつらい天を欺きて、此孽のがるべけんや。孔子病給ひしとき、子路（孔子の弟子）祈らんと乞しかば、丘がいのること久しと宣り。其いのるとは平生の動作道にそむかず、今此病にあふものは是命也。しかるを何ぞ鬼神にいのるべきぞ。子路固に孔子に告ずして祈る事あらば、弟子惻惻の心なるべし。邵康節の詩に

禍如許<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>人須<sub>レ</sub>諂

福若待<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>天可<sub>レ</sub>量

といへり。是よくいひつくせり。自禍の階をなし、是を悔顧ることをしらず。鬼神に祈て免るべくば、鬼神にも売僧すべし。鬼神も善を善とし悪を悪とする事能はずんば、幽冥の中恐るるにたらず。まことに諂て免るべし、吾行いまだ福を得べき基なく、天に求て得べく、天も又邪正虚実を分つ事能はずば、天もはかるべし。人すら賢き人は賄、売僧の為に鼻負偏頗の沙汰に及ばず。増てや鬼神は冥冥として昭昭たり。天は高きに居てひくきを見る。蒜を食ふものは必臭く、酒を飲ものは面酩し、其箸をとり盃を酌を見ずといへども、其事

自明なり。己が私の智を以てこの過をかくさんとするは愚也。蒜の臭と酒の気とは猶かくすべし。天はかならず。欺べからず。心を勞し身を苦しめて祈んよりは、かへりて我徳を修むべし。此上にて災あらんは、是命也と思ふべし。禍福は命あり。人力の及ぶ所に非ず。此理をさとらざる人は、網を結ばすして魚を羨み、わなをすてて兔を求るなり。決して此理なし。偶祈て得ること有と雖も、是偶然なり。祈が為にして得たるにあらず。譬ば小兒に待人を問が如し。待人歸るべしと謂て歸りたりとて、是小兒の占委しき故といふべからず。ただ偶然なり。もし祈願の志有て求ることあらば、齋戒清淨にして衣服を改め心をひそめ妄意を動さず天に告べし。今の俗然らず。或はこの災のがるべく此病さるべく、堂塔を建立すべし鐘を鑄るべし鳥居を立べしなど噪ぎあへり。畢竟是等は仏神と商ひするなるべし。是は猶病に臨み難にあふるとき、一身主とする所なき人はかくもあるべき事なり。或は詭論色慾により奸佞嫉妬により、人を害さん事を計るともがら、神木に釘をうち仏像を倒になしていのる。此事ゆめゆめ人にあたるべからず。自らその災にあふべし。むかし漢武帝鬼神の説に迷ひ、殊更越の巫を信向ありしに、董仲舒と云臣しばく諫め奉りしに、武帝彼巫をめし仲舒を誣さしめ給ひける。仲舒正して南面して経論を誦詠しけるが、何事もなく、巫即時に死しけり。神は非礼をうけずといふも、ここをいへる事なるべし。

織田信長恩賞を賜ふ話

たとへば家に失火事あらんに、平生家の者にいましめて火を大事にし過ちなかりし人は賞せられず、火事にのぞみて鬢をやき眉を焦せし人は大に賞せらるるが如し。されば常に火を慎しみけるこそ火事出来て働きし人よりは手柄なるべきを、かへりて何の沙汰もなし。織田信長今川義元と沓掛山にて戦のとき、梁田出羽守計をすすめて、終に勝軍となり、毛利新介大に働き、義元の首を取てけり。信長馬より下りざる内、沓掛村三千貫を出羽守に与へ、馬より下りて新介を賞せられけり。誠に信長に非ざりせば、出羽守の功名新介に次ぐべかりしを。

#### 雨森彦太郎軍功を讓る事

加賀利長松山の城を陥れたまひけるに、利長の小性大音藤藏とし十六なりしが、先登して首をとる。雨森彦太郎これにつづひて城にのり、おなじく首をとり、はやく馳かへりけるに、利長祐筆に命じて一番首と記さしめたまふ。彦太郎辞謝して、否一番首は大音藤藏にて候。某はその次にて候とぞ申ける。一番首をとりたるよりも遙にまさりてけなげなり。武士は誠にかくこそありたけれ。

#### 武田信玄の知言

武田信玄の曰、人は唯我したきと思ふ事をせずして、いやと思ふ事をするならば、分分

体体全く身をたもつべしとなり。

後世を願ふに心得違多き事

今の人、後世願ふも施しをするも、十が八九名と慾となり。人と毫釐の利をあらそひとりて堂塔の建立し、奴僕にからき目見せてかたへに施し、口舌争論の片手に念仏申すは、却行あじぎらして道を急ぐが如し。いまの後世ねがひ施しする人を見るに、阿鼻焦熱の物語りに肝をけし、九品蓮台の上を生れて百味の飲食に全盛の盡したき慾よりなるべし。さなきは彼人こそかかる善根をなしつれと、人の称讚にあはん事をもとめてなり。然れどもその身五戒を外にし十悪を事とし、傍に仏に諂はんは、医師の薬をすてて能書をよみ、疾の瘥んことをもとむるが如し。先五戒を守り慈悲ふかく物にあらそふ事なくして、心しづかに後世ねがはんは、まことの道心者なるべし。

上たる人の心得下たる者の痛となる説

一村の長は一村の人の命、是にかかる。一県の長は一県の人の命これに係る。一国の主は一国の人の命是に係る。天下の主は四海の人の命これにかかる。人の命ここにかかるといふ事をしらば、其任の重き事をするべし。夫一个の民は悪をなし罪科に行はるといへど、自らなしてみづから其咎をうくるのみ。仮にも人の長ともなるべきものは、我慮り一度誤



れば、なべての人その難をうく。暫も薄氷をふむの心をわするべからず。又貧しき人富る人の隔あるべからず。曹子建が詩に、

十指有<sub>二</sub>長短<sub>一</sub>

痛惜皆相似

といへり。小指は母指よりほそく、母ゆびは中指より短しといへども、其病をうくるに臨んでは、小ゆびの痛も母指のいたみも皆異ならず。富貴の人の栄辱にあふも、貧賤の人の栄辱にあふも、富貴の人の憂苦も、貧賤の人の憂苦も、十の指の長き短き違ひはあれど、そのいたみことならざるがごとく、人に貴賤貧富の差等はあれど、憂苦哀樂の違あるべからず。

### 怒の道の説

世話に身をつめりて人の痛さを知れとは、賤しき俚語ながらよく道にかなへり。身の痛き事をしらば、人もいたかるべしとしりて人に施さぬなり。よろづにつき人の善悪は見えて身の善悪は見えぬものなり。さるを人の善を見ては是にしたがひ、悪を見ては身にこりなば、いづれかおしへの道にあらざらん。或は我子のわれに不孝なるを見ては、われこの道を以てわが父につかへず、我弟のほしいままなるを見ては、我此道を以てわが兄につかへざれ。我身に骨の折る事は人の身にもほねをれ我身に悲しき事は人の身にもかなし。一切みなしかなり。是を恕といふ。大学には絜矩の道といへり。宋の王旦といひし人、寇準

と云し人と同じくつかへて、王旦は中書にあり、冠準は樞密院にありしが、中書より出しけるものに印を倒につきて遣しけり。寇準速に人を遣して行譴しけり。そののち樞密院より出しけるもの、亦あやまりて印を倒につきけり。時に中書の者ども右のごとくにせんとひけるを、王旦聞てさきの樞密院よりの仕方よしと思ふやあししとおもふやといへば、あしければこそといひけるを、人の悪きと知りてその悪きを学ぶ事やあるとて、其事は止にけりとぞ。陶淵明小者をおきて子に遣すとて、是もまた人の子なり、愛して使ふべしとなり。是等はみな道をみることに明かなるが故に事に泥まず。或人、ひとの物を無体に所望しけるに、貴殿のほしきほどわれも惜きなりといひしとかや。わがをしきものは人もをしきなり。此理をわきまへざるは、理にくらければ也。崇峻天皇の御時、山猪を獻するものあり。時の大臣蘇我馬子奢怒なりしかば、天皇これをにくみ給ひ、いつか我きらふ所の人をきる事この山猪のごとくならんと宣ひしを、馬子に告ぐるものあり。馬子おそれ東漢直駒といふものをして天皇を殺さしむ。是より直駒馬子が寵を得て、其第宅に出入して内外の隔なく。大臣の女河上姫にかよひけり。是はもと崇峻天皇の嬪御なりし人なり。馬子この事を聞つけ大に怒り、直駒が髪を庭前の木の枝にかけて、弓を取て是に向ひ、汝わが言を用て天皇を弑す、汝愚にして我いかりを慮らず、我を諫めずして天皇を弑すと、一つの罪を数ふるほどに箭一筋をはなつ。直駒いかりて敢て伏さず。吾其時は大臣ある事を知つて天皇の尊き事をしらざるのみ、餘事我辞謝せじと、さんざんに罵りけり。馬子腹をすえ

かね、劔をぬき腹を潰し、そののち首をきりけるとかや。其身正からず忠ならずして、人のよからん事をもとむとも、人いかでか其罪に伏せん。たとへば火をたかずして湯の熱むことをもとむるが如く、酒をすすめて酔なといふが如し。

### 物事に一得一失の理ありといふ説

金は天下の至宝なり、これを貯ゆるものは家富めり。されど是によりて身を失ふ者あり。人参黄耆は薬の随一なり。されどこれを服して命をおとすものあり。劔術兵法は身を衛るものなり。されど是によりて身を殺すものあり。医術は人を救ふもの也。されど是によりて人をころすことあり。飲食は生を養ふものなり。されど是によりて我体をやぶることあり。国の大臣は国を治むべき者也。されど是によりて国を乱るものあり。此さかひ能工夫すべし。

### 交際の道にころえあるべき事

権貴の家と女多き家とは、屢出入すべからず。あるじ留守の家ながるすべからず。主人欠伸せばはやく立つべし。人來り問ふ事ありとも、志他にあらば詳かに説べからず。吾好事なりとも人このまざることば語るべからず。朋友にも深切の異見再三にして可まかずんば止むべし。我なすべしと思ひ立たる事は、明日ありと思ふべからず。貧しき人は疎みや

すく、富貴の人は親みたまきものと知べし。金銀にのぞみては争心起るものとしるべし。

### 和歌を引て材芸ある人の箴を説

勝ことをこのむは人情の常、まされるをにくむは人慾のつねなり。この故に材芸有人はなほ慎むべし。木林を出れば風かならず折といへり。近頃材智は身讎と云こころを、中院通躬卿の御歌とてうけたまはり侍りし、

人に見よおのがえならぬ花の香に

をりつくさるる梅の下枝

### 人のあしきを捨よきを取といふ訓

愚ならん人のいふ事もよく／＼察しよきことあらばもちゆべし。ましてや賢人の言をや。今人過ありて、其非を人に正さるれば、昔の誰某もかかるあやまちはありし、況吾等ごときの人をやなどて唆る事をばしらず、是小人の過は必文るといへるなるべし。人のよき所をすてて、其悪き所のみを取て手本となさば、何の際限あるべき。たとへば料理をするが如く、魚鳥の羽鱗骨腸なんどあしきものをばとりすて、そのよき所をとり、その上にも塩梅して、酢を加へ酒をさして旨からん事をこそもとむれ。旨き肉をばすて、羽鱗骨腸を用ひ、筍は籜をもちひ、飯はもみを炊ぎたらんには、いかでか是をよしといはんや。米は

五穀の首、鶴鯉は魚鳥の最上なれども、今の如く拵へたらんには、藿の汁藜の和物にも劣るべし。ものの直からん事を欲せば、準繩規矩を用ゆべし。是をばさしおきて、杓子を取て定規とせんには、千万年を歴るとも直くはなるまじきことなり。今の人あしきをとりて身の過を覆ふは、是ぞ誠の杓子定規なるべし。

### 継母と前家子まゝことの話

世に継母継子の中とて、十に七八はよからぬものなり。是説あり。実の親はたとひ杖をとりて指南などするとても、恩愛たがひに深きがゆへに、暫有ては互に如在なくなりゆき、他人も見咎もせぬものなり。継しきは世の習ひとて、子ははや、定めて継母なれば、心中に打とけはし玉ふまじと思ふもの己に胸中に横たはりてうせず、これ不和をなすの基なり。よりて仮初にいふ事もむかへて聞故にむねに逆ふ也。ましてやその子に教訓などせんに、左なきだに金言耳に逆ふならひなれば、わが過は思はずして、是をまましき故なり、誠の親ながらへてあらばかかる憂目にはあはじなど、世をうらみ述懐し、ぐわんぜなきわかき同志、理非わかたぬ隣の媪や嬪など、その品は何ともしらで、すはや此人も継子にくみするとて、彼子と呶きかたり、長しき異見は、露なくて、いろいろとそぞろをかはれ、互にへだて多く重り、果は怨敵の思ひをなす。むかし或人の家に屏損じたりければ。其子のいひけるは、かく屏の損じ候、盗人こそ入べけれといひける。暫くして隣の人来りて、その子

のいひしごとく、屏の損じ候、ぬす人こそ入べけれといひしが、果してその夜盗人にあひけり。かの親、吾子をば智ありてよく察したりとおもひ、隣の人をばこの人かくこそいひし、もしや盗人の手引などしつらんかと疑ひけるとなん。さればそのいふ詞も同じ言にして、聞く人も同じ人ながら、子と他人とのへだてあれば、その思ふやう雲泥万里のたがひとなる。おなじ秋の夜も、少年遊樂の燈の前にはあけやすきをうらみ、孤婦愁思の閨の中には明やらぬをかこつ。秋の夜に違ひはあらざれども、志し各ことなればなり。今まことの親生れて再びいふとも、そのことば假令同じ事もあるべけれども、已に継子の心に隔あれば、おなじことばも怨のはしとなる。閔氏騫幼し時母におくれ、父ふたたびめとりて三人の子をぞまふける。この母常に閔子騫をにくみ、冬のきものには蘆の穂などつみて絮となしきせける。されど閔子すこしもかへりみず。母を敬ひ弟を愛しみけり。其後父この事をしりて大に怒り、母を追出さんとしけるを、閔子とどめていふやうは、母ましまさば某ひとりこそ寒からめ、母もし帰り給はば三人ともに寒からんと、さまざまにしてなだめけり。母も此事に感じて遂に慈母となりけるとぞ。誠に親のみあしきと思ふべからず。又継母となる人も、始のほどは嗜みて最愛みけるが、とかくする内子などまふけ長るにしたがひて、いつしか兄弟の分を忘れ、我子を世に立んと思ふより、枕の上の寝物語にも、長子のよきことをばすくなくいひ、我子のよき事のみかぞへたてていふより、男の親も何れをいづれのへだてはなけれど、その詞十度ももたびにかさなれば、さては此子は愚なりけり、

この子こそ賢りけれとおもひつき、是は次第にしたしくなり、彼は次第にうとくなり行くとあり。不幸にして此変に逢ん人はよく慮るべし。曾参は孔門の内にもわきて孝行なる人なりしが、その母機をおられけるに、一人来りて曾参こそ人を殺しけれと云。母はたをおる事やまず。すこしも騒げる色なく、吾子は人などころすやうなる者にてはなしとて手やめもせず。かかる所に又一人来りて曾参人をころすといふ。されども母前の如くいひて驚かず。時にまた一人きたりてかく云ければ、さてもかかる事あるにやと抒をすてて逃けり。後にきけば曾子と同じ名の人にてありけりとぞ。曾子の賢親子のしたしき中さへ、度かさなればうたがひのこころ起るなり。まして常ていの人の中をや。

#### 盗人の名目種種あるといふ説

盗人はすまじきものなり。盗のすまじきといふ事を知らば、是より義に進むべし。傍の人の曰、盗はすこしく志ある人はせず。頑愚の人にとくべし。豈中人以上の失ならんやと。予が曰然らず。盗人も数あり。壁を穿ち垣をこえて人の財を盗む、これ穿踰の盗人といふ。或は人の家におし入、あるひは往還に待伏し、人をきり衣裳をはぎとる、是を野伏強盗といふ。足下の云所は是等の盗人なり。足下一をしりて其餘をしらず。上君に事るの忠なく、下国を治るの術なく、中自の職分に怠り、坐に大禄をはむ、是位をぬすむの盗人なり。謀をめぐらし偽を行ひ、君を弑し国を奪ふ、是国をぬすむの盗人なり。詩書を腰にし口法語を

絶ず、退て其隙をうかがへば、父子相争ひ、兄弟相闘ぐ、これ儒をぬすむの盗人なり、頭を  
 まるめ三衣をまとひ、我慢偏執のこころつよく財利にふける是法をぬすむの盗人なり。人  
 のよき言をぬすみ自の利口とし、我行のあしきをいひまはし愧る事を知らず、是言をぬす  
 むの盗人也。ひそかにあらゆる悪心をおこし、顯に善を示して外面堂堂たる君子あり、是  
 善をぬすむの盗人なり。心に無量の僻事をふくみ、色をかくろひ肩をそびやし諂ひわら  
 ふ是色をぬすむの盗人なり。人の志の在所をはかり、其人の機をかながへ、その喜ぶべき  
 事をなし、忌所をさけ、父子のしたしき情をさかせ、兄弟の恨を起し、夫婦恩愛の中をやぶ  
 り、朋友の交りを失はしめ、その惡至らざる所なく、猶自ら人の腹心と思はるる如き、是  
 心をぬすむの盗人なり。盗人の至て大なるものは、心をぬすむの盗人なり。その次は国を  
 ぬすむの盗人なり。穿踰の盗人の如きは、盗人の至て小きもの也。国を盗むものは侯とな  
 り、鉤をぬすむもの誅せらるるといへり。まことなるかな穿踰はかるき事ながら察せずん  
 ばあるべからず。壁をうがち墻をこゆる事はあらねども、一紙半錢の事により交易の間子  
 の親の物に於る、弟の兄における、奴僕の主人における、盗人の例なるべし。したしけれ  
 ばとてぬすむべきやうはなし。諺にも針とるもの車をとると云り。色に耽り博奕を好める  
 人を見るに、十に九此失なきはなし。吾輩の如き、天地の間に悠悠として、少壯の努力つとむべ  
 きをしらず。老の至りなんとすることをはからず。飽まで食ひ暖かに衣て、自ら守るの節  
 なく、人をおしゆるの術なく、幾か間中の好光陰をぬすむぞや。



## 村松喜兵衛の辞世

近頃浅野内匠頭長矩の家臣、村松喜兵衛入道隆圓、大石良雄等の義士と、吉良義秀をうち、つゝに終を全しける辞世に

命にもかへぬひとつをうしなはば

にげかくれてもここをのがれん

人の至て大切なるものは命なり。命にもかえぬひとつとは、義にあらざして何ぞや。村松是を求て是を得たり。むべなるかな四十七士の員につらなり、名一天を動しける事。

## 技芸勝れたる人慎かたの事

技芸は人の嗜むべき事なり。芸勝れたらんはつつしみもまたいよく重かるべし。さなきは人の妬にあふものなり。情これを鑑るに、我に甚まされる者をばその失をもとめてしる。我に少しく勝れる者をば妬む。我と相敵する者をば吾よりおとれりとす。我より劣れるものをばあなどりあざける。是芸に遊ぶ人の病なり。

## 劣れる者は見わけやすく勝れたる者は見わけがたしといふ説

西施愛し江、嫫母棄し鏡といへり。西施は昔の美人なり。江に臨み自の影のうつるを愛す。

嫖母は悪女なり。我影をにくみて終に鏡をすつ。我身と人とを見るに、われより勝れるもの、我よりおとれるものあり。我より劣れるものは見やすかるべし。われよりまされるものは見がたし。蠅螂の臂をはりて車に向ふは自らのちからをはからざればなり。高雄の文覺、西行がふるまひをききてかたはらいたく思ひ、その法師来らばしたたかに打べしなどつねく罵りけるに、或とき西行高雄に至りけるに、文覺これをむかへてける。文覺が弟子など定て例の荒氣、よも唯事にはあらじと思ひけるに、さはなくて、むかしより知れる人に逢たる如く、ことごとしく色代して遠く送りて別ける。弟子等不審におもひ、其事を文覺にとへば、いやとよ西行は我にうたるべき者にあらず、動すれば我をこそ打べき氣色あれと云しとかや。されば人此所に暗して、みづからまされる人の上にたたんとす。或は其及ばざる事を知るといへども、及ずとすることを忌憚りて、その人の過をたづねてそしり、我能をかぞへてかざりほこり。尚甚しきは怨みそねみ、はては害心を起すなり。人各聖人にあらざれば其非を見付ていはんには、誰かあやまちなかるべき。譬ば刀は紙を切り揚枝をけづり梨柿の皮を剥が如き、一切日用の事にもちいんには小刀には遙におとりぬべし。さらばとて敵にのぞみ戦をいどむにあたりて、小刀何の用にか立べき。小刀のよき所あり。刀のよき所あり。刀のなす所小刀用にたゞず、小刀のなす所刀用にたゞずといへども、其一体を論ずるに、小刀は刀と同じく論ずべき物にあらず。ひとり是のみならず、不学にして学者ぶり、人に問ふ事をはぢ、不才にして能をてらふ、貧くして富るをまなび、賤く

して貴ぶる。孔子常なき人を、なけれども有とし、虚けれども盈りとすとのたまへり。是等の類なるべし。

### 鼯鼠といふ言葉はいふまじきといふ説

鼯鼠といふ事は仮にも云まじき事なり。理非を正さば理のある所なり。何ぞ是を鼯鼠といはん。今勢ひにつく人、手を入れ足をいれ、誰人のひいき、誰人の引懸にあづかると、嗚呼がましく時めき悦ぶは何の心ぞや。あさましき事どもなり。芝居の役者野郎などのいはんには相応の言なるべし。

### 物の命をたつもまた助るの理ありといふ論

物を殺すはよきことにあらずといへども、一我意に殺生せずと心得たらんも悪かるべし。なるほどその道を修する出家道人は、蚤虱ごときものもみだりに殺さざる事は、其律あればなり。豆をうへ粟を蒔んに、その蓬莠をかりすて、その上にもあしき笛をばとり捨生育るにぞ登るものなり。今日政事などに預るべき人は、其利害の大小を考ふべし。江海の鱗を漁り、山林の羽毛をとるも、これに命をつなぐものなり。就中野猪の稼をそこない、熊狼の人をくらひ、小にしては雉兎鼠等の災をなす。ころさざればその費あげて数ふべからず。盗人の国中を横行し、或は恣にして上の法度を背き、或は人を殺害するとき、皆その

尤けやけきものなり。是いはゆる蓬をとり莠をさるのたぐひなり、瘰疽といへる腫物の甚しきを、指を切りて療治する事あり。齒などのゆるぎいたむに、此齒をぬきて去る事あり。此指此齒をしきに違はなけれども、總身の苦痛にはかへがたし。此者どもも可愛がらぬにあらねども、多くの人の歎にはかへがたし。然れどもかねて国人に仁義の道をおしへず、飢寒に及ぶ様になして、其民罪をおかし盜をせんは、教と政のいたらざる故なり。おしへずしてひとのよからん事を願ふは、手習させずして物を書んことを求めるが如し。民を貧しからしめて盜人を禁ずるは、田をほして稲のあしきをにくむが如し。国に罪人多きは執政の愧なり。一県一邑を主どる身も此心得大切なるべし。むかし秦穆公秘藏の馬を亡れけり。時に岐下といふ処の民三百餘人は是をころして食ひけり。官人ども是を見付て、法度に行んと云けるを、畜生の故に人を殺すべからず、馬の肉を食ひて酒を飲ざれば人にあたるものなりとて、酒などたびて赦されけり。其後隣国と戦おこり、穆公すでに危ふかりし時、かの三百人のものども命をすて、拒ぎ戦ひ、終にかち軍となりけり。されば天地の間春夏は物を生じ長じ、秋冬は物をからす、そのからすといふものも、草本五穀みなみのりて来年生ずべきもの、基をなせば、からす内に生ずるの理あり。今物をころし人を殺さんも、助るが為にしてころさばさもありません。此理をしらずしてみだりに物の命をたゞば、大悪無道の人なるべし。

## 学に志し芸に志す者の訓

今の人、或は学に志し、あるひは芸にこゝろざすもの、一旦憤を起し、昼夜をわかたずつとめはげむといへども、已に一月を経半月をすぎ、怠る心はやく生じ、吾つとめの至らざるとはいはで、生質の過に誘す。馬ははやしとて朝暫はしりてやまん、いかでか牛の終日ありかんに及べき。谷間の石の磨け、井榦ふたのまるくなるも、豈一朝一夕の力ならんや。今日やまず、明日やまず、今年止す。明年やまず、然して後そのしるしあり。人一生の力をその道に用るさへ尚その奥儀にいたるはやすからず。况我一月半月、乃至一年半のつとめを以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚しきなり。むかし李白書を匡山によむ。漸倦て他行せし時、道にして老人の石にあて、斧をするにあふ。是をとへば針となすべきとてすりしと云けるに感じて、勤めて書をよみ、終にその名をなせり。小野道風は、本朝名誉の能書なり。わかゝりしとき手をまなべども、進ざることはいとひ、後園に躊躇けるに、墓の泉水のほとりの枝垂たる柳にとびあがらんとしけれども、とゞかざりけるが、次第く高く飛で、後には終に柳の枝にうつりけり。道風是より芸のつとむるにある事をしり、学でやまず。其名今に高くなりぬ。

知ること易く行ふことは難しといふ説

知る事はやすく、おこなふことはかたし。然れども委しくしらざれば行ふべからず。たとへば農業のごとき、時をたがへず時、草かり糞かへばよくみのるとは誰もしれど、唯その事をしりてせざれば益なし。又そのしるにも、時を考へ、培のかひやう、鋤やう、鍬のかひやう、夫々に付てその子細ある事、つとめざれば知がたし。善をすればよく、悪をすればあしきとはしれたることながら、よきにも子細ある事なり。つとめてまなばざれば其理わかちがたし。今しるといふものは、多くはしらざるなり。西施の美きことは知ざるものなし。然れども西施のために心を傷しむる者はなし。東隣の娘そのかほよきこと西施に及ばざれども、心この為にうごく。甘露は天下の至て甘きものなり。しかれども飲たきと思ふ慾なし。牀頭の醴は時として好むことあり。是しるにも厚薄のちがひあればなり。困碁は小芸なり。然してその勝べき理をたづぬれば、たゞ先をするにあり。先をすればかつと云ことはしりやすき事なり。さりとして先はしにくきものなり。善事のよきはしりやすくして、善事をするはかたき事なり。

よしとほむるもあしと毀るも必察すべしといふ説

毀誉は人の大節なり。然といへども世挙りて誉るもかならず察すべし。人こそりて毀るも必きつすべし。況一人はほめ一人はそしるをや。たとへば訟事あらんに、両方理なりと思へばこそ、互にいひつりてやまざるものなり。是を奉行のさばかんに、兎角ひとり

かち一人はまくべし。かちたる人は奉行をほめ、負たる人はそしることなり。又あしき人なりとも、それにともなふ人は、是をよしと思へばこそ交るなれ。我よしと思ふをばほめ、我あしと思ふをばそしる習ひなれば、その毀誉によりてその人の善悪も分ちがたし。おなじ一盃の酒ながら。上戸は酔ひておもしろきものなりといひ、下戸は多ひて苦しきものなりといふ。まして人伝などにきかんことは覺束なきことなり。昔人ありて、其子ある寺へつかはし置けるに、暫ありてにげかへり、住持のことを誹りけるは、我に月代それといひければ、例の如く剃けるを、そりやうのわきてあしきとさんぐにしかられ、あるとき我厠にゆきけるを見て、何とて厠へは行し不届なり、向後厠へゆくべからずといひ、其後朝飯たくとて味噌をすりけるに、これも味噌をするがきこえぬとて、理不盡の次第殆困窮におよぶとてかたりけるを、親きゝて、さりとて、出家にも似合ざる事なりとて、いそぎ山へ登り右の事ども語りけるに、住持きゝていや／＼さやうのことにてはなし、常々髪よくそる故、このごろそらせけるにいたく眠りて、これ見たまへこのごとく切こみ候とて是をみせ、そのうへ厠も常の厠へはゆかで、奥なる隠所へ行をとがめ、味噌も常のみそをさしおき、客へ遣ふべきをつかふ、是等の指南をこそかへす／＼もいたしつれと申けるにぞ、親もことほりに伏しける。信濃の国その原といへる所に木あり。遠くより見れば帚のかたちの如し。よつて是を帚木といふ。されど近づきてみれば帚に似たる所もなく打繁れりとかや。誠に遠より見聞くと、親しくみきくは、多く此帚木の類なるべし。凡人の物を批判

するも、吾このむ所をこそほむるものなれ。俠士に歌よむ人の評判させ、日蓮宗に真宗の  
 評判させんに、いかでか公論あるべき。同じ道を二人して行むに、一人は健かにしてこの  
 道ちかしといひ、一人はつかれて遠しといはん。是みちに違ひあるにあらず。心にちがひ  
 あればなり。たとへば義経のことを論じて、義経をよしと思ふ人のいはんには、此人誠に  
 幼より常人にてはおはしまさざりけり、共に天を戴かざる讎を報ぜんと、夜夜院を出て劔  
 をうち、遙に秀衡が人となりをみたて、是より飛鳥も落るばかりの勢の平家を二三年のう  
 ちにせめほろぼし、亡父の恥辱をすゞぎ、法皇の宸襟をやすめ奉り、再たびたえたる源氏  
 をおこし、兄頼朝を天下の武將と仰しめたりと云。又義経に不<sub>レ</sub>満人は、なるほど此人戦争  
 一通りは自由を得たる人ながら、平氏を亡し恣に忠盛の女をいれ、梶原景時と詮なき口論、  
 大将たらん人のしわざに似ず、腰越より追かへされしも、いはれなきにあらず、然るを都  
 に逃のぼり、頼朝追討の院宣を申うけ、芳野山にてはひとりの静にわかれかね、児女子の  
 涙をしぼられしなど、一人の義経、よしと思ふ人の論と、あし<sub>ト</sub>とおもふ人の論は、まこ  
 とに雪と墨なるべし。其あしき所をすて、よき所をとる、是人を用ゆるの道なり。その悪  
 きをばあし<sub>ト</sub>とし、よきをばよきとする。是公の論なり。また其分分の相応について云こ  
 とあり。鼠を甚大なりといふとも牛の小きには及ばじ。蛇を甚短しといふとも、蚯蚓より  
 は長かるべし。今日人をよしといひて誉るも、悪しと云て毀るもその場<sub>ク</sub>を考ふべし。



## 梅園叢書卷之中

### 早分別に後悔多しといふ説

かりそめにおもふと、とくと考へはかると相違あるべし。むかしある君楼をかまへ、是に登りて詠られしに、遠近の風景限なくおもしろかりけり。只一方にその臣何某が家の森ふかくしげりて、眼をさへぎりけり。よつてかの臣をめしがればかねてさときものなれば推量すべしとて、此楼より四方の風景を望べしとなり、かの臣心づき、家にかへり、我あたりの樹の目の障ればこそ、かくはまねき玉ひつらめとて、己にきらんとせしが、いやく君の心をよく察するものとおもはれては、行末むづかして、しらぬふりして打捨おきけり。其後君何やらん計の有しとき、心さとき臣等疑をうけゝるるが、此臣ばかり右の事思ひ出給ひ、何のうたがひもなかりしとかや。善となく悪となく、一旦の早分別に後悔する事多きものなり。あるひは友達の中よく交りて義の兄弟と云しも、一朝の怒に敵のおもひもなすものなり。古語に逢<sup>レ</sup>人只説三分話。未<sup>レ</sup>可<sup>三</sup>全抛<sup>二</sup>一片心<sup>一</sup>と。多くは左様御尤の世の中なれば、始の程はしたしきものなり。その時心の奥底もなく云つくして後日に悔む事あるものなり。さりながら是は一通の論にして、唯世のありさまをとくものなり。もし義にあつく信を守る人あつて、おなじく心をあはせんは、其上の事やあるべき。又幼約

束とて、まだ幼後紐子供などを、時の中よきにまかせ、言名付して悦ぶことあり。此事誠に変なくんばよかるべし。されど人間十年憂も悦も打かはるならひなれば、あるは富むが貧しくなり、あるは身上の難にあひ、あるは病あるは不和、終に人のわらひとなるもまゝある事なり。又はかりそめに通ひなれて、暁の鳥をうらみ、来ぬ夜の鐘に待わびなどして、偕老同穴と誓けるが、一入染の薄紅葉、いつしかに心うつろひて、夜かれの床をうらみかこつ心のやるかたなく、日舌嫉妬の端となり、恩愛忽引かへて、神にのろひ仏にいのり、或は理不盡の心中、或はひとり縊れ、一門親族の面をけがす。是等はもとすでに正しからざればいたむにたらず。或は若き女などの新に夫におくれ、生て世にあるべくも覚ぼへず、いづくの淵瀬にも身を投んなどおもへども、さすがに死にもやらで髪などきりたるが、月日の立にしたがひて、いつとなく心もかはり髪のはすもあり。嬉しさのあまり憤の餘におもひたることは後には違ふものなり。頼朝石橋山の合戦にうちまけ給ひけるに、佐々木が粉骨をつくしけるを感じ、吾天下を得ば、日本半国を以て賞すべしと有しかども、後には此沙汰なかりけり。

### 理窟と道理との辨

理窟と道理とへだてあり。理窟はよきものにあらず。たとへば親羊をぬすみたるはおやの悪なり。親にてもあれ悪は悪なれば直に訴ふべしといへるは理窟なり。親羊を盗しは悪

ながら、親悪事あれば迎子是をいふべき様なしとてかくしたるは道理なり。人死してはふたゝびかへらず、帰るべきみちあらば、なげきても歎くべし。かへらぬみちなれば歎きて益なしといへるは理窟なり。人死して再かへらず、帰るべき道あらば歎ずともあるべけれど、かへらぬ路こそ悲しきなど歎くは道理也。

### 分限相應こそ長久の術といふ説

老子曰。美好不祥之器と。是によつて思ふに、我家衣服道具にいたるまで、我分限相應ならんこそ長久の術なるべけれ。詮ずる所、大厦千間夜臥八尺、良田万頃日食二升とて、たとひ大なる家に金銀をちりばめたらんも、坐する時は膝をいれ、臥時は足をのばすばかりにすぎず。たとひ万町の田あり、膳に山海の珍味をつくすとも、腹をふくらかすまでの事なり。きものは寒をふせぎ、道具は用に適ばたりぬべし。刀はよくきれ、印籠は薬をだによくもたば、切羽せつは銅はばきは銅にて、根付は小さ瓢単なりとも事たりぬべし。夫よき物を貯れば、我は人にほこるの氣あり。人はうらやみ愧るの心あり。刀をよく飾りてさしける男、ある人の刀のあしかりけるを笑ひけるに、拵のあしければとてきれぬ物かとして打果しける事ありし由。間際筆記などにもみえたり。塩冶判官は妻の美に身を失はれ、伊豆守仲綱は馬の良に命をおとせり。宋の孫甫といふ人にある人硯をあたへけり。その直三十千となり。孫甫この硯何故にかくは価の高きぞとてへば、此硯常に湿あり、墨をすらんとする時息を以て

呵すれば水流るとぞこたへけり。孫甫是を聞、硯たとひ一日に一担の水をつくすとも、纒にあたひ三錢にすぎず。此物何にかせんとて。終にうけざりしとなり。又宋の呂蒙正に鏡を獻ずるものあり。曰、此鏡よく二百里を照すと。蒙正わらつて、我面小し。何ぞ二百里を照すの鏡をもちいんとて、二度その鏡の事をいはずとなん。古賢奇物を尊ざることかくの如し。人の姿は天に得るものながら、今男女美質あるものはいどむもの多し。挑者多ければ節を失ふ事多し。質醜ものはいどむもの少し。挑者すくなければ節を失ふ事すくなし。老子の詞、果して吾をあざむかず。

### 物に譬へて子たる者の教を説

庭に栽る草木も伸たるを抑へ、倒たるをたすけ、繁れるを洗し、長きをたちてこそ自然とおもしろき姿も出来るものなれ。又直にのばさんとなれば、小枝をかきゆがめるを採などすれば、直にのぶものなり。うちすて、闇たらんには、さのみおもふほどにはなり難かるべし。人の子を生育んも、有のまゝにして教なからんはおしき事なり。五穀も生たるまゝにてくさぎる事もなく、培ふ事もなくばかならずよくはみのであるべからず。兎角手を入れてだによく登る事は稀なるもの也。生付よしとておしへざるはよき刀とてねたばつかぬが如し。よき刀のうへにねたば付たらんには、なをくよくきれぬべし。生質うつくしからんも、裸になして出したらんには文なくぞあるべき。うつくしき人にうつくしく衣紋引つく

ろひたらんこそ、本意なるべけれ。よきといふにかぎりなく、理に窮なければなり。聖人の智も学事をすてず、ましてや其以下の人をや。犬は無智のものながら、よく教たるはさどく、おしへざるは用に立ず。又は愛に溺れて、わきの人の指南さへ親の心に僻事とおぼへ唯さむからんひもじからんとのみいひ思ひ、その我儘氣随もやがて直らん。長ひとならば家業にももとづくべしとおもふ内、月日人をまたねば、早指南の頃もすぎぬ。心ありてよき事いふをば、渠をにくむと心得、白地にそしりにくむ。是劔のうへに蜜をぬりて小兒にあたふるが如し。一旦あまく快よしといふとも、遂には舌をやぶるべし。

世の中の麻は跡なく成にけり

心のまゝのよもぎのみして

といふ如く、麻なくしては、よもぎもおもふまゝにゆがみねぢれて蔓るべし。おやたらん人の分には、それぐの師をもとめ、よくくおしゆべし。其上にあしからんこそ子の罪なるべけれ。いとおしき子を杖におしへよとは、道にかなひたる諺なり。しかればとて子の心に吾は親の教ざればとて親の過の如くに心得んは子の道にあらず。雖父不レ可レ以子一といふ事あり。親たとへ教ずとも、子たらんものつとめてその道其芸をしるべし。吾もとめば得ずといふ事はなかるべし。或は博奕に耽り、又色をこのむが如き親のおしへなしといへども至らざる所なし。この心移して道をもとめば、何事か求がたからん。

## 上たる者は下の邪正をよく察せよといふ説

大小のわかちはあれども、人の上に立ん人は其心得有べき事なり。兕角人の上たらん人には、其下に立ものはいかにもして其人の氣に入らんとのみ思ふものなり。故に頤を動せば左に(マ)わしり、眸を動せば右にはしり、勝負をあらそへば得をさせ、理窟をいへば道理を附、其者の心にも僻事とおもひても、十に九ツはいはざるものなり。色を好めば色を勧め、味を好ば味をすゝめ、故なき是式の進物に酒肉は更なり、幣帛財宝唯その人の氣色のよからん事を希ふ。肩をそびやしてへつらひわらひ、御髭の塵を払ふ。是等はよくく心に明なる所なければ売僧てれんの堺分難くして、正直律儀の人と見なすものなり。得るに臨んで義を思ふとて我ために宜しき事あらん時は、是義は不義かと其わかちを考べし強金銀ていの事のみには非ず、義に当ては舜堯の天下をうくれども、へつらへりといふべからず。義にあらざんば一銭の錢半片の紙なりともいかでか心に快らん。むかし宋の子罕(襄十七年)と云し人に、玉を獻ずるもの有けり。子罕うけずして、我は貧ざるを以て宝とす、汝は玉を以て宝とす、爾が宝をうけんとなれば、吾宝を失ふなりとて、終に還しけるとなり。左こそならぬ。昔物のなきにより心につるぎをとき、或は正しく諫言にても云人をば、此節かれより辱をうけたりとて、其ひまを伺ひ取ておとす。誠に慾なきより清きはなく、慾あるより汚しきはなし、又正しき人は人わらへども、然とおもはざれば、容悦をとつて笑は

せず。与れども義をはかりて漫にとらず。事の沙汰につきても、非をまげて是とせず。人の気色のあしければとて、その為に身を屈せず。或は時として異見を云。事情に親切なる事のみいふゆへに是らは結局無礼者、苦者、或は佞者など、怪めらるゝもの也。勿論一流人の心に障る事のみいひて、手柄の様に心得たるもの有といへども是は道理にたゝぬ事をいふものにて、正しき人とは其わかち分明なり。人にいさめ正さるれば、かれがやうにいへども、渠もこの過ありとて、還てさきの人の悪を捜しもとめて、露改ることをしらざるもの也。とて我心に辞なる事を多くいふ人はよき人と心得、うまき事のみいはん人はよくく察すべし。此事貴賤によらずと雖、尤人の上たらん入のおもふべきことなり。左程に心得ても人の氣に入ざる事はいはぬものなり。又その異見を聞て、夫通例の事、その方差図に預るべきかなど、横ざまの利口に正しき人は口を噤み、痒き所を搔やうなる人のみ集り、我身の過はいふに人なければ、しることなくなり行くものなり、左いふ人定て親切ならんかとおもふに、一旦勢ある時に手をつき、足をかゝへしには似ぬものなり。是を炎涼の世態とて、火あり煖なる中こそ、打会て手を炙るものなれ、炎つき火きえては、そのほとりを見やる人もなきものなり、又勢ある時より、左のみ媚諂もせざりし人は、零落たりとて、むかしにかはる心はなし、君子之交淡如水小人之交甘如醴といへり。一旦膝を交へ、手を携へ、兄弟の如くいひ睦しも、恨穢芥の聞におこり、腕を握り齒を切る事あり。醴は甚あましといへども、久しては香うつり味変ず。水は始より味もなく香もなしといへども、

幾年をかさねてもかはる事なし。故に君子の親み交るを和といふ。小人の親み交るを同といふ。和とは塩梅の如し。たとへば一杯の羹といへども、あるひは塩をさし、或は水を入れ、いろ／＼とそのよき様に正して忤ざるゆへに、きはめて旨き味となる。同とはその心の合たるにまかせ、善悪の差別もなく、成程尤と同ずる計にて正す事なければ、水に水を用ゐるゝが如し。幾久しくかゝりてもよき味にはなるべからず。是同也。

### 堂塔建立の説

宇治殿平等院を建立し、阿彌陀堂供養有けるに、山僧何がしの阿闍梨を社導師に請じ給へるに、施主分に、此御堂造立の故に、地獄に落させ給んこそ浅猿く侍れととかれければ、聴聞の人人興をさましける。供養過て、いかゞして此罪懺悔し侍らんと有ければ、この御堂造立の間、非分に人を悩し給へる分を、御得分の物にて償返し給はば日出度侍りなんと申されければ、そのゝち悉く尋き、人夫迄もいとまの分をぞ給ひける。今日堂塔供養装厳とて、餘義なく人をすゝめ、あるひは金銀の利足に人を潰し、夫役にくるしめ、玉をまき、金をちりばめ、我はがほなるはかの阿闍梨のいひし地獄にこそ落べけれ。心だにその道に適なば、堂塔の奇麗にはよらざるべし。近ごろ

縦横の五尺にたらぬ草の庵

結もつらし雨なかりせば



と読し人もあり。瞿曇の教はいざしらざる事ながら、人情をもつてはかるに、恐くはその道とする所、大厦広門の謂にはあらじ。堂塔寺院輿馬僕従、衣服家具は、たとへば匣の如し。我道とするものは、たとへば玉のごとし。匣いかばかりいみじくよそほひたりとも、玉なくば何にかせん。匣そこくにしつらひたりとも、玉だにあらば人誰か是をいとひすつべき。

### おとし物したる主と拾たる者と曲直裁判の話

宋朝夫婦餅をうりて生業とする者、あるとき道の傍に銀の軟挺六囊に入ておとしけるを見付けるに、もとより正直なるものどもにて、何とぞ返さばやと普く觸けるに、その主といふ者来りければ、是をわたしけるに、三をば御辺に奉らんと云けるが、おしくや成けん此銀七ありしに、六あるこそ不審に候へと怪けるを、ひとつとり候心に候へば、何しにかくは返し申べきといへども、兎角して論果ず。所の太守へ訴へける。太守見付たる者をば正直とみながら、別の処に妻をめし、事の子細を問るゝに、夫の詞に違ず。よつて奉行、見付たるもの夫を引籠らずして元の主に返さんとするは正直なり、今主といふもの七あるを落したるなれば。この軟挺にはあらざりけり、是をば夫婦の者にたぶべし、彼ぬしは七あらんを求て取べしとぞ判れける。

### 物の性の辨

靈験は、我信の有所にあり。強何の神何の仏とさすべきにもあらず。鱗の頭も信向せん人は、その験を得べし。仏舍利なりとも信せざらん人には、しるし有るべからず。もの我心より靈なるはなし。心のむかふ処自その信あり。鳴物もたたくときにはなり、たゝかざればならず。我一生餘念なく信向せんに、などかその感応なからん。磁石の鉄をすふも、磁石鉄をすふの誠あるゆへに、鉄感ずる事ありてよる。唯の石を以てすはせんとせば、いかでその験有べき。幻術者の幻をなすも、平日の力すべて爰にあれば、人の目を奪ふ様の事もあるものなり。一向そのしるしなしといはんも偏なり。むかし唐汝南鯛陽といふ所に、田にしてひとつの磨を得たり。主いまだ取ざる内、人ども車に物をつみて通りけるが、是をみてとり、車にのせ去けり。不意の物なればとて、鮑魚一喉をその処に残し置けり。頃有て、その主往てみるに、最前の磨はなくして、鮑魚のみ有けり。因て大に怪しみをなし、徧くかたりつたへけるに、次第に発向して病をいのり、福をもとむるもの引もきらず。終に宮をたて、鮑君神とあがめ、巫など數十人集り、もてはやしける程に、数百里きゝつたへく、その事大かたならず。其後程へてかの商人来り此由をき、是は我おきし魚なりとて、堂に上り取てすてけるが。その、ち何のしるしもなく成行けり。物之所<sub>レ</sub>聚斯有<sub>レ</sub>神。人共爰成<sub>レ</sub>之耳、といへり。一喉の鮑魚。さまで禍福をいかでかなし得ん。されども人の信仰するに至ては、この心迷ふがゆへに、病ましぬれば運盡たりと思ひ、或は神のうけなきと明らかめ、験あれば神の徳とおもふ。物毎我心にかく有んとおもへば左ある抛に覺ものなり。鶏

はいつもその鳴声にかわりはなけれどもコツケコウロとなくかと思へば、コツケコウロといふが如し。東天光と啼かとおもへば、東天光といふが如し。取てかへるときけば、とつてかへると云が如し。和州菩提山の忠寛正信房といひしは、よく眠る人にて、人眠の正信と云けるが、ある夜鶏のなきけるを、寐耳に、御所より忠寛とめすとき、なして、あはただしく御前へ参りけり。是は何事ぞと有ければ、召れ候つると申ける。さる事なしと仰ければ、猶鶏の声する方をさして、あれ、忠寛と御召の候つるぞと申ける。燈はひとつ光りながら、目を病人のみるには、五色の輪相かさなり、虹の如く煙の如し。一物もなき大虚も、花ちり虫の翔るが如し。何の音なき所にて、耳をやむ人の為には、嵐のはげしく吹ききり蝉のかまびしく鳴が如し。実に此事あるにあらざるも、一心顛倒すれば、種種無量の変怪、眼に遮り耳にそふ。我かつて史をよみし時、秦の二世皇帝、關羽、張飛など夢み、詩集をけみせし時、孫光憲など、詩などつくりし夢を見けり。是によつて思へば、僧徒の或は極楽にゆき、閻羅王にあひ、地獄の有さまなど夢に感ずる事さも有べし。夢はもと心の影像にしてあやしむにたらず。ある人のかたりし、おもひもよらぬ事を夢にもみるなれど、傘さして鼠の穴にはいる夢はみずといひしを、かたへの人の、此話き、たらん人はみる事有べしといひしは。尤におぼへ侍る。夢は心の靈より発すれば、偶さきの事にあふ夢も有べけれど、夢ごとに左あるものにもあらず。或は五臓の病により、あやしき夢もあるものなり。ある人のいひし、或はよき夢みたりとて、嬉しともおもはず、あしき夢みたり

迎あしくも思はず。あしき夢をばよき夢のさしつきとなし、よき夢をばあしき夢のさしつきとなすと云し。一時の戲言ながら、おもしろく聞へ侍る。右云ごとく、神に祈り仏にちかふも、我靈所自然に感ずる事あり。又病いゑなんとし或は災已にさらんとする時にあたりて、その験の如く思ふ事あり。又狐狸の業として、色々のあやしき事などしいだして世にはやる事あり。一旦その言しるしある事もあれども、久しくはその験なきものなり。又機をまふけ或は幣を動し、あるひは仏に光明さゝせするとき事をこしらへ、人をたぶらかすものあり。是も大勢ゆく中には、病なほるもあり、死病にあらざればのちはよきものなり。是等のものいかでか人の禍福をなす事あらん。中にもわけてかなしきは、病難災苦にあひ、物の辨もしらぬ神子山伏やうの者ども、ことごとくしく鬪などとりて、其神の崇、其仏の崇と驚せば、大に恐れわなき、家財重宝もおしまず取出し頼むにぞ、過分の得して、験なければ主人の信心なきを云、供物のたらぬなどの、しる。やゝこゝろよき時は、大にほりおごりこそやすからね。もし吾行ひ理にもとるに於ては、その神其仏と限るにもあらず。天神地祇或は人誰か是をいからざらん。神や仏のしわざにもあらざるを、神仏に僻事いひかけてん、仏神昭覧あらば、いかでか是をにくまざらん。神は人を護り、仏は世をすくふとこそきき侍れ。木一本きり候花一枝をり候、あるひは参り年のあしかりけりなどとして、無下なる目に人をあわせんは、人だに長しき人はかゝる偏執はなき事ぞかし。是等も皆病苦災難は時としてあるものといふ事をしらぬゆへなり。もし又かゝる非分の崇をな

す仏神あらば、その祠ともいへ堂ともいへ毀ちすつべし。其権なからん人は左様の所にゆかざるべし。唐の秋仁傑といひし人は、淫祠千七百処を毀ちけるとかや。豊前小倉の城内に一の小さき祠有けり。何の神といふ事をしらず。城主此地穢多し、城外清浄なる地を択みうつすべしと有けるに、俄に眼痛出し甚しかりけり。人人是は神の崇なるべし、祠を移す事しかるべからずと云ければ、城主いかつて穢しき地を清浄の所に移さんと云に吾なんの過かある、夫に崇をなす神ならば、邪神なり、恐るゝにたらずとて、急ぎ其祠をこぼち、城外に持出し焚払けるに、眼もおひくゝにいえけるとなん。又一種妖怪あり。ひとり狐狸のわざのみならず、犬猫蛇へび猿やうのもの、木石深山大川、いろくゝの精怪あるものなり。されど正しき人をば犯し得ざるものなり。むかし魏元忠公、末家にゐられし時、ひとりの婢ありけるが、庭にひとつの猿来りて火を焚けるをみて、大に驚、かくと申しければ、我僕なきをしりて、手伝するに社と云て見やらず。又公家来のものを呼けるに、犬人の声して答へけるを、孝順なる狗とてほめられけり。又独坐して居られしに、鼠など大分集り前に手を拱して居たりけるを、汝が輩食にうへたりやとて食をあたへけり。又ある夜鶴やぐらの家の軒に來りてなきけるを、家のものどもうたんとてひしめきけるを、かれは昼目のみえぬゆへに夜飛ものなり、南のかた越にゆくとも、北のかた胡に行とも彼が心にまかすべしとて、打捨おかれけり。又ある夜女ども多く集り、公のまへに立けり。公是をみて、我床を堂の下におかんといひければ、あつまり昇きおろしけり。又もとの所にやりてんやと云けれ

ば、もとの処にもち行けり。しからば持て市にゆきてんやと云ければ、女ども再して、是寛厚の長者なり、犯すべからずとて皆逃ちりけるが、その、ちは何事もなかりしとなり。又漢の張遼といふもの田を買けるに、田の中に大なる木あり。耕作の邪魔となりければ、人をきりに遣しけるに、切口より血出けり。人人驚き返てかくと申ければ、老たる樹は汁出るものなりとて、自下知してきらせけるに、中に大なる穴ありて、長四五尺ばかりなる白髪打垂たる人の如き物出て、張遼が方に歩よる。張遼むかへて打ころしければ、つゞひて筒様成物四迄いできるを、盡打ちころしてける。よの者は怖て地にふして居たり。仔細に是を見るに、人に非獸にあらず、怪しげなるものなり。遂に其木をば切取けり。その年天子より司空に辟れ、侍御史袁州刺史となりけり。天地のかぎりなき、其変怪も又かぎりなしといへども、是正人君子をおかすにたらず。変怪にあらざれども、変怪とみれば自変怪なり。化物にあひたりといふ、多くは夜なり。勿論かゝるものは陰物にて、夜氣に乗じて出といへども、夜は臙にして物の文目もわかたぬものなれば、松の木の繁れる、石の立たる、尾花の戦まで、あやしくみゆるものなり。これをうろたへもの、見誤りて唱たるが多し。かゝる事をかたるものは、必慥に見たるごとくかたるものなり。又平生虚をいひなれたるものは、跡かたもなき事をも理窟よく拵てかたるものなり。成程世上にかゝるものなしといふにもあらねど、さまで沢山なる事にもあらず。こはおそろしと思ふ時は、其虚に乗じていろくのもの変怪をなすことあり。むかしあるもの妻の死しける。出やせまじと

おもひ居けるが、むかしの有さまの如くよる／＼来りける。男大に難儀して、祈祷手をつくしけれどもしるしなく、ある道人にゆきて問けるに、道人碁をうち居けるが、碁子を一握かが手に入れ、かの幽霊にむかひは何ぞと問べし。これをしらずば必きたるまじ。若しらば黒か白かをとへと云ければ、いそぎかへり是は何ぞと問ければ碁子といふ。黒か白かと問ければその色をこたへけり、男おそれて又道人にかくと告ければ、さぞあらん、直にその碁石を持行、数はいくつと問べし。幽霊けつして数をしらし、その時此碁子を投付なば、幽霊全く来るまじといひけり。男又立かへり数はいくつと問ければ、答ず、ときに碁子を取て投付けるに、搔けすやうにうせけるが、再来らずとなり、吾心の妄想より起るものなれば、我しる事をばかれもする。碁子の数は我知らざる故彼しらず。彼しらざる時はけつして出ず。吾こゝろ決定する故、目明にして眼花なく、耳さわやかにして蟬も嵐もなきが如し。故に真言陀羅尼、是によつて魔魅決して近づかじと決定する故、是をおかすものなし。漢のとき、汲の令應彬といふ者、主簿杜宣と云人に見けるに、ともに酒を酌けるが、高き処に弩をかけ置けるが、杜宣が盃に映ひ、宛然蛇のごとくみへける。快ず思ひけれども、しめて是をのみけるに、共日より胸腹裂が如く、療養手をつくせどもしるしなし。其後應彬行て事の子細をき、きつとかの弩をみつて、強て杜宣をおこし、もとの所におき酒を酌せけるに、かの弩の影うつりて蛇の如し。よつて是は弩の影なりとさとしければ、杜宣大に悦び。是より疑とけ病いゑけり。是は此あたりの事なりし。ある禰宜、

小村祭の返りに夕立にあひ、大鼓もちながらぬれぬれて過けるを、是をばしらで又壱人同じく、雷の鳴がおそろしさに耳など抑へて走りけるが、俄に電ものして霹靂しければ、あわや我かしらのうへに落かゝりけるかと覚えて、かたへの溝へ落込けるに、禰宜も同じく上に落かさなりて、互に肝を潰し只一息に遁けるが、其後我こそ正しく鳴神といふ物みたりといふに、いか成物ぞとへば、隣の村の禰宜何がしに少もかわらずと云ければ、人人噴出しけるに、左なの給ひそ、慥に大鼓までもちて居られたりと云けるとぞ。世上の妖怪おもふに此類多かるべし。夫一生の間を觀ずれば、慶あり、哀あり。貴しては公侯となり、零落しては非人乞食ともなり、生るゝ事あり、死する事あり。此世の中の姿なり。花ちれば子を結び、葉落れば芽を生ずるが如し、この所をよくしりて、非分のもつめをやめ、君臣父子夫婦兄弟の道をつくして、生死貧富は命に委すべし。左いへばとて、我生業をもすてよといふにはあらず。すこしも非分のもつめをせず。正業をいとなみ、此上を命にまかすべし。まへにいふごとく、父母兄長の災をいたみ、天に祈るがとき尤なり。人はもとより天地の間に姦れ、天はち、地はは、なれば、或は年の早にあひ不熟にあはんには、雨をいのり、年をいのる、すべて吾実にあり。或は大赦を行、窮民をすくひ、奢を省き、人の心大に悦び和する様にして、年をいのり雨をいのらん、などか感応なからん。人の心和なれば、天地も感応するものなり。香花をそなへ僧巫に祈らしめんは、抑末なるべし。今の人神に詣仏にまふで、何事をつぶやくとおもへば、或曰家運長久、或曰子孫繁昌、或曰



二世安樂、又曰七難即滅。すべて我勝手によき事のみ取あつめて、神の正直、仏の寂滅なるものをばとり失ひ、災難にかゝれば、世の中には神も仏もなき事かと騒あへり。死生有<sup>レ</sup>命、富貴在<sup>レ</sup>天、といふ事をしらば、かゝる非分のもともめはあらじ。今日のことにも、吾敬ふべき人には、衣服を改め物ごとに念を入、麤忽なる事もいはぬ様につゝしむものなり。いかに神ものたまはぬとて、心やすくおもひ慢り、人にさへ云がたき事を、この者は我妬くおもひ候へばころしてたび候へ、此女にあわせてたび候へ、富貴になしてたび給へなどは、是非分の望にあらずや。上に立ん人に、かれをばころしてたべ、是をば我に下しおかれよ、米下され、金下されと、理不盡の望せんに、誰か尤とおもふべき。たとひその事かなふとも、神のしるしにや、又もとより左あるべき筈にやありけん、しるべからず。一ツ二ツかゝる事有ても、すべて有べきことにもあらず。近世はやる富といふものゝ如し。千百人の内に仕合なるもの有て、一人金を取たるとて、吾もさこそと、生業も打すてかゝらんに、取事も有べし、大かたはとらぬものなり。中に小賢しきものはその得失を考へ、始よりかわぬほどに、損もなく得もなし。ある人の曰、然ば神も仏も無用のもの。予が曰、左にあらざ。天照太神は我国の太祖として、天皇孫長く此国を治め給ひ、御座北極の星とともに動かす。人は更なり、雲にかける鳥、水に潜む魚まで、その徳沢を蒙ざる物あらんや。仰ても恐有、その有がたき所を瀆仰すべし。尚その所々の徳沢ある、神しかく慎守べし。我親方の如く心得たらんは、いかばかりか勿体なき事なるべし。孔子曰、敬<sup>二</sup>鬼神<sup>一</sup>而遠<sup>レ</sup>之とな

り。遠ざくとは、なれあなどるべからずといふことなり。

### 仏舎利の辨

仏子の舎利ある事を称揚して儒者にほこる、古来種類の辨あり。おもふに是は氣血のこれるもの、焼によつてなるもの也。儒者は火葬をいむ。その有無はしるべからず。このもの有とも何にかせん。

### 誠といふの説

一勺の水を海に入れて、海の水増たりといはんは愚なり。まさずといふは妄なり。水をくわゆる所は我にして、増と増ざるとは我にあらざる物は、しるて其辨をもとめずして可也。我に在処のまことをつくす、是君子の道なり。誠とは、うそをいはざる事とのみと心得たらんは愚なる事なり。ある人司馬温公に誠にいる方を問ければ、妄語せざるより入とぞ。成程妄に語らず、うそをいはぬより、誠の道には入なれども、虚言をいはぬを誠とはいはぬ也。いつわりをいはぬに對する信は小し。偽なきに對する誠は大なり。罌粟の子煙草の実に至て小きものなり。地におとさば目にもかゝらぬ様なれども、内に一ツの誠といふ物あつて、奪べからず。隠すべからず、味すべからず。覆べからず。その時いたるに及んでは、芽を出し葉を生じ、花を開き実を結ぶ。その子を水に腐し、火にやきて芽を出さずといふ

は、その子の尤ならんや。是によりて物の子を実といふは、実に則誠なり。一ツも誠ならざるもの有て、腐たるものは生ず。痛たるは苗瘁く。人の誠も尚かくの如し。昔衛の靈公と云し君、夜夫人南子と共に坐し給ひりるに、遙に車の轟く声しけるが、闕下にして声なく、闕下を過て又鳴けり。靈公誰なるべきやと、南子にとひ給ひければ、是は蘧伯玉なるべし。礼に下<sub>二</sub>公門<sub>一</sub>式路馬<sub>二</sub>、といふ事あり、忠臣と孝子とは不下<sub>三</sub>為<sub>二</sub>昭昭<sub>一</sub>信<sub>二</sub>節<sub>一</sub>、不下<sub>三</sub>為<sub>二</sub>冥冥<sub>一</sub>情<sub>二</sub>行<sub>一</sub>、といへり、蘧伯玉は衛の賢人なり、夜なればとて礼を廢じと云ける。靈公人を使して見さしめけるに、果して伯玉にて有ける。人しるまじきとて歎くは妄也。四知といひて人しらずとおもひても、天しる地しる神しる吾しる、いかでかお、ひかくすべき。たとへば一升の米、日に二三十粒をとらんとも、措ともしれざるべし。然ども久しくおくと時はまし、とる時はへる、草木も朝みしいろも。暮にみし色も、きのふみしもけふみしも、さしてかはらぬ様なれども、誠といふものすこしの間断なき故に、いつ太るともなければども次第にふとるものなり。人のみぬ間とて間断あらば、草木もおもふまゝにはのびもせまじ。深き谷の蘭も、遙なる山の紅葉も、人なしとてもよく薫りうつくしく照ばこそ、人至りたるときも香きよく色麗しけれ。人の至を待て香をはなち色を出さんとせば、筈にあふ事あるべからず。常々心にかけて帚灑したらん座席と、俄に蜘蛛の囀とり柱ふきたらんは、いかでか見まがふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨み偽に文は、誠の俄掃除なるべし。如<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>其肺肝<sub>一</sub>とて、人欺くべからず。我心を欺なり。

偽も人にいひてはやみなまし

心のはゞいかゞこたへん

この歌のごとく、人をば欺くべけれども、心に心を顧て、いかに今の如く誠ならざる事をばせしぞいひしぞ、人をば欺に、などで自の心を自は欺けると咎たらんには、自恥かしくなり、ひとり居ても額より汗出べし。畠山重忠鎌倉殿の不審を蒙し時、偽なき旨を起請を以て申上べしと有ければ、我一生いつわりを云し事なし、いつわりなきと申上は、此事に限りて起請をばかくまじきとて、終に書ざりしこそ、勝れていみじくきこえ侍る。人は我意の有ものゆへに、一旦我いひ出せし詞は、たとひ悪しと案じ当りても是非に云募りて我を立る物なり。是腐たる実のごとし。実といふ物を探題うしなひたるなり。当式の者この意あれば人に憎み疎ぜられ、人の主人となり、奉行頭人などこの意あれば、人をやぶり国をそこなふ。北條泰時政をしられける時、下總国のある地頭、領家の代官と相論あり。対決に及とき、領家尤なる道理申立けるとき、地頭手をはたとうち、泰時のかたにむかひ、あらまけやと云ければ、並居ける人々一同に笑ける。泰時うちきゝて、いみじくも負けるものかな、某代官として久しく成敗しつれども、かゝる事うけ給らず。あわれまけぬるときこゆる人も、適はぬ迄も陳ずる習ひ成に、前の一通さもときこゆる所、領家の御代官申さるゝ所肝心ときこゆるに付、何事なくまけ給へる事、返くもいみじく聞へ侍り、正直の人にて御座けりとて、打泪ぐみ感じ申されければ、始わらひける人人はにがり切てぞみえ

ける。是によつて訴論殊更の僻事もなかりけるにこそとて、まげ様を感じ六年の未進の物、三年迄ゆるしけり。たとひ訴論まけになり、いかなる事にあはんとも、いつわりはいふべからずと、わが心を欺かぬ誠ゆへ、人をもかくは感ぜしなり。

### 碁将碁に遊ぶ人の箴

碁将碁すしごく握槊その品はかはれども、人の心を奪ふ事は同じ。或は一二の遊侶を迎へ、或旅路の憂をわすれ、鬱をひらき生を慰んにはよし。又何もつとむるいとなみもなく、手を拱き人ことなどいはんよりは、物ごと相忘れんはよかるべし。半生の勢力を是につくしてんは、その器小きに似たり。誠に局にのぞむときは、盛衰勝敗ありて、甚おもしろきものゆへ、夜のあけ日のくるゝもしらざる物なり。よつて是を木野狐ともいへり。晋の陶侃といひし人枰を江にせずめしも、事に害ある事を察してなり。近頃黒田如水軒、石田三成と怨をむすばれしも、その事碁より起れり。畠山が讒にあひしも、平賀武蔵守と、六郎重保と碁を争うよりおこれり。さいへばとて此事しらざれといふにもあらず。身謙り、人と争ひいかるの心をやめて遊ばゞ、時として養生の道ともなるべし。

### 書をよむは身を脩るのためといふ説

書をよむにも、日用の事に交るにも、一ツくかへりみて我身のためにせば、あしき事

は制となり、よき事は鑑となり、日日にその徳すゝみて、時として書にはおこたるとも、学には益すゝむべし。学はまなぶと訓じて。鳥のとびならひ、猫の玉をとるも、みな夫々の方をまなぶなり。人は人の道を学が学なり。四書六経も、人となるの道人を治るの道こそとき給へれ。是によつておもへば、日日の事みな学なり。書をよむとも、身をかへりみ察する事なくんば、一向草紙浄瑠璃本をよみて心を慰むべし。鏡をみるはかたちをつくるためなり。書をよむは身を修るためなり。笠置の解脱上人、如法の律儀興隆の志ふかく、六人器量有気なるものを見たて、持齋律学せしが、その内一人、のちには持齋もやぶれ、己が房に児どもあまたおき愛しけるが、さを川といふ川にて魚をとらせ、自下知して弟子の僧に火をたかせけるに、鍋の湯あつくなるまゝ、魚跳出けるを、児是をとり、手水桶の水にすゝぎ鍋に入れにけり、房主悦び、よしよくしたり、児どもは夫底におめぬがよしと謂ける。同宿の僧、是は犯戒にては何ぞと、ひければ、声聞戒には波逸提、菩薩戒には波羅夷なりと答へける。しらずば無知ともいふべきを、なまじい恐に戒相明に説けるこそをかしけれ、されどもひとり此僧のみにあらず。此轍をふまざる事はかたき事なり。書を読ん人の僧のために笑るゝ事なるべし。或は過をかざり人にほこるの具と心得、手にもたらぬものなど取つめ、或は身の過など人の異見にあへばいろく勝手によき事とり集め辨にまかせて云まぐる、たとへば食は身を養ふべきものなるを體して人をも食傷させ、吾も食傷したるが如し。

## 梅園叢書卷之下

### 五行家の説書多しといふ論

物として其弊あらざるはなけれども、陰陽家の説、尤人に害ある事多し。その事はもと陰陽五行を推して旺相死囚勞の理を出ずといへども、遂には枝により葉により、大に理に戻る事あり。四季に大将単遊行の方ありて、春は東、夏は南、秋は西、冬は北を塞りとして、諸事動作にいむ。正月丑、二月辰、三月未、四月戌、五月子、六月卯、七月午、八月酉、九月亥、十月寅、十一月巳、十二月申の如き月塞とし、六十甲子、寅より午に至り金神遊行の方とし、日を以ていへば、子の日に子の方、丑の日に丑の方をいむ。又方に金神七殺の方あり。九坎、五貧、八貧、十死、歸亡、往亡、凶会、大禍、赤口、赤舌、狼籍、滅門、没日、滅日、黒日などいひて、多く事を廢する事あり。成程一通俗にしたがひ、冠昏の如き大事には、吉日をゑらむもよかるべけれども、物ごとに忌嫌ふの心ふかく、時を失ふ事愚なるに似たり。諺にも陰陽師の門に逢たへずとて、あまりつよく物をいめば、草とる日とてもよくなり侍る。よき日なりとて悪事をなしなばあしかるべし。悪日なりとも善事なしなばよかるべし。目のあたり試べき事には、天火地火の日なりとも、五穀を植て、よく培ひ耘りたらんには、よき日を択て植、培ず耘らざるよりは遙によかるべし。もし又麦の春の霜

にいたみ、稻の秋の風にあれんは、吉日にうゑたるも、悪日に植たるも、おなじく損るべし。もし又鴻水火難等に逢んには、吉日に建たる家も、悪日に建たる家も、おなじく波にゆられ、又一片の燼となるべし。武王以<sub>二</sub>甲子<sub>一</sub>興、紂以<sub>二</sub>甲子<sub>一</sub>亡といふ事あり。周の武王殷をせめ、甲子の日にあたりて殷紂王を亡し給へり。同甲子なれども、武王の為には吉日にして、紂王のためには悪日なり。湊にかゝる船の、東にゆくは西風を順風といひ、東風を悪風といふ。又西にゆく船の為には。東風順にして、西風不便なり。もとより風に順逆はなく、吾ゆくに順逆あり。日に吉凶なし。我に吉凶あり。とかく悪き事をする日はすべて悪日なり。よき事をする日はすべて吉日なり。吉凶豈外にもとむべけんや。適日を択ずして成就せざる事あれば、手をうつて日時をゑらまざる故なりといひおもふ。左あらば吉日選てんには、千が千成就すべきや。世の中の吉凶禍福は人間の常にして、たとへば糾る墨なの如く、上になるもの下になり、下なるもの上になり、変化定なきものなり。たとへば一握の糠をとりて水にながさんに、先だちて流るゝあり、後れて流るゝ有。風にふかれて何かたともなく吹ゆくもあり。又先だちたるが石に礙られておくれ、後たるが先だつも有。おなじく掌に入、一同に掌をはなれても、そのゆく処各同じからず。又一本の木なりとも、一段は神を彫仏を造り首をかたぶけ手を合て人に貴れ、一段は踏板足駄の類となりて人に踏れ、木屑は薪となりて灰汁桶の苦にあふ。おなじく生をうけながら、その用らるゝ処は天壤也。よつておもへば年月時をくり合せ、易の六十四卦に配し、一代の吉凶をとくは覚束なき事な



り。且甚しき害ともいふべきは、その生年によつて、女男をこらす事有。男女をこらす事有。弟に丑の年の者あれば嫡家に崇有など、口にいふのみならず、書に筆し人を誤る事勝て歎くべからず。諺に、盲千人、目明千人といへども、盲千人目明一人にも及がたければ、一人の手一河の流支がたく、人の心に城をなし郭をなし、その惑ときがたし。異朝にもかゝる事ありしにや。齊威王の少子に靖郭君田嬰と云し人の妾懷妊して、五月五日に子を生けり。その頃の諺に、五月五日に生たる子は男子なれば父を害し、女子なれば母を害といへり。是に因て田嬰快ずおもひ、努々是を生育べからずといひけるを、其母かくして是を養ひ田文と謂けり。長てその兄弟へ頼み、父田嬰に逢けり。田嬰悦ず。その母に謂けるは、吾この子を養ふ事なかれといひしに、何ゆへにかくはこしらへけるぞと云ければ、田文畏て、何故かくは五月の子を忌給ふやと問けるに、五月の子者長与<sub>レ</sub>戸齊、将<sub>レ</sub>不利<sub>ニ</sub>其父母と答ふ。田文きゝて、人生れて命を天に受るか、又命を戸にうくるか、もし命を戸に受るとならば、随分その戸を高ふすべし、誰かその戸とひとしかるべきと云ける。田嬰も理に屈し、その後は餘子とおなじくつかへけるが、田嬰子供四十餘人ありし中にも、此田文こそ孟嘗君とて、齊の国も此人有しゆへに、隣国よりもおもくおもはれける。今男をこらす女、女をこらす男などいへるも、往往しるしをたてゝみるべし。盡く左あるに非。又その外の年の人も、早く夫に後れ妻に離るるもいくばくぞや。是はその人人の幸不幸なり。全く年のしわざにあらず。明の太祖、天下を得給ひてのち、朕と年月日時を同して生れたらんも

のは、いかゞ有べしと思召、あまねく尋給ひしに、一人をもとめ来れり。見たる所やせつ  
 かれたる野夫なり。汝何を業とするぞと問給ひければ、蜜十三籠をやしなひて世をわたる  
 由こたへけるに、此もの何事をかなすべきとて放しかへし給ひしとなり。或は畜をもとめ  
 木をきり、首途家移、方を立日時を改め、禁忌甚多し。東家之西、西家之東とて、東のか  
 たの家の西は、西の家の東也。南におるとおもふ人も、又その南における人のためには北也。  
 屋敷は水難なかるべく、山潮など来ず、月日の影正しくうくる所をよしとす。されどもあ  
 るじの心あしくば、家退転の基なるべし。婦は婦徳正しく、従順至孝ならば、方あしくと  
 も繁昌すべし。鳥のなき、犬の咎、鼬梟やうの物のなき、菌の生、燈のきえるにも、忌嫌な  
 僻のふかくてこゝろを悩すごとき、笑ふべし。孟嘗君がいへるごとく、吾命を烏犬など  
 うけなばさもあらん。もし命を天にうくるとならば、彼等いかんぞ人に禍をなすべき。口  
 あるものは鳴き、羽あるものはとぶ。人の物いひかたるが如し。禽獸はもとより天地の偏  
 気にして、無智のものなり。夫に万物の靈として天地と並び立て、三才ともなるほどの人  
 かの無智の禽獸に教られなば、人はた禽獸の下に立べきか。たとへば数代相伝の君、譜代  
 の家来につかへたるがごとし。皆理といふものをしらざるよりおこれり。いたむべし。

### 人の所長を扱ふべき事

間際筆記にのす。伴氏生質、寡欲也。尾山氏吝嗇なり。相交る事睦じ。ある人伴氏にと

ふて曰、其元と尾山氏このむ処同からず、然るに甚むつまじきは何ぞや。伴氏の曰、尾山は才芸我にまされり唯財に蓄し、このゆへに我この人と交る事十餘年に及べども、渠に我ためとして一錢を費さしめず。是を以て相善といへり。人誠に長き所あり。短きところ有。その長き所に交り、短きところに交らざれば徳を得る事多かるべし。むかし欧陽永叔、易の繫辭を以て孔子の書とせず。文中子とるべからずとす。韓魏公これと相したしかりしが、此事をしりて終に話こゝに及ざりしとかや。永叔もふかく韓魏公の徳に服して、百欧陽修を累ぬとも、何ぞあへて韓公を望まんといへり。朋友の道、義において忠に告正すべき事あり。勢いふべからざる事あり。能々工夫あるべし。ひとり朋をとるのみならず、君の臣をつかふもしかなり。人の才同からず。国の政をしるべき才あり。敵をきり旗を奪ひ城をのり山を砕くの才あり。国の財を量り用をとゝのへるの才あり。他国へ使し君命を辱ざる才あり。よく君をいさめ人を規すの才あり。その品さまぐなり。たとひ是等の才ありても、その場ぐに使ざれば、吾存分の働なりがたし。大工の木をつかふがごとし。いかによき材木を集めたりとも、梁となるべき木を柱とし、柱となすべき木を棟となさば用には立まじ。漢の高祖を名君といひしも能能その人人の能を見たて、張良を師とし、肅何を相とし、韓信を將とせし故なり。もし韓信を師とし、張良を先鋒となし、肅何を行人などなさんにはたとひかちをとるともその驗おそかるべし。近頃片桐石見守は茶人のきこえありけるが、烟草の火入唐金のわたり物にて、いかにもおもしろき器也、人みなよき香炉なりと云

けれども、石州そのまゝにして闇れける。ある人その子細をとふ。石州の曰、是火入とすれば上品なり、香炉とすれば下品也となり。誠にこの心をもちて人をつかはゞ。人人己一盃の器量をつくし国家の益となるべきか。

### 吝嗇儉約の辨

吝嗇はしわき也。儉約は始末なり。おなじ事のごとく心得たらんは僻事なり。その跡似たりといへども、その用処大に同からず。夫財宝は限あるものにして、望は窮なき物なり。限ある財を以て、窮なき望を遂んとならば、日に万金を費し、天下をあげてその用をなすとも、つくる事有べからず。入をはかりて出し、財を節にし用をつゝしむは、天の道なり。しわきは、財をおしむ。始末は財を節にす。節はふしといふ字にして、竹に節有ごとく、よき程々にて止る事ある。しわきは多く財を貯んと也。始末は用る所あるが為也。孔子、夏禹王を謂く、菲<sub>一</sub>飲食<sub>二</sub>而致<sub>三</sub>孝於鬼神<sub>一</sub>、惡<sub>二</sub>衣服<sub>三</sub>而致<sub>四</sub>美乎黻冕<sub>一</sub>、卑<sub>二</sub>宮室<sub>三</sub>而盡<sub>四</sub>力乎溝洫<sub>一</sub>と。平日吾口体を養ふもの菲きは、鬼神に亨祀する者は豊に潔せんとなり。常の衣服を文らざるは、祭の衣冠を鮮にせん為なり。吾おる家を卑ふるは、井手構塘ごときをいとなまんとなり。是はかしこき君の教、下々迄もその分々相守るべき事なり。青砥左衛門夜に入て出仕しけるに、いつも燧袋に入てもちたる錢を、十文誤て滑川へおとしけるを、其辺の人家へ人走かし、錢五十文出して炬十把かひ、是をともして終に十文の錢をもとめた

り。さて云けるは、十文の銭は、只今覓ずば長く水底にしづみて失ふべし、五拾文の銭は商人の手にありてうせず、彼にあると吾に在と、何の差別かあるべき、かれ是六十文の銭をうしなはず、豈天下の利ならずやと云しとかや。是吝嗇なる人のすべき事にあらず。東坡李公擇に与る書に、口腹之欲、何窮之有、毎加<sub>二</sub>節儉<sub>一</sub>惜<sub>レ</sub>福延<sub>レ</sub>寿之道といへり。誠にいろは性をきるの斧、味は腹をとらかすの薬なり富貴の家を見るに、情慾味もとむるに随ひて有ゆへに、一時心をこゝろよくし、口を爽にするを悦て、身の勞るゝをしらず、中寿をたもつ人はすくなし。山野の人は求むべき貯もなく。日日東にはしり西にはしり、慾と味ももとめがたく、故に多くは寿し。是東坡が惜<sub>レ</sub>福延<sub>レ</sub>寿といふ所なり。今海内久しく太平の化にほこり、奢侈の風日日にきそふ。謹んで古をおもふに、武田信玄の制詞に、妻子之衣類、一万石所持之士者、京染等の小袖、五千石より下は薄板、五百石より下は袖、百石の内外は布子たるべき事。又いはく、親族の間、一とせの内振廻の義二度、二汁三菜之外可<sub>三</sub>停止事<sub>一</sub>。又三好筑前守義長志を得てのち妻の衣帯を京にもとむるとて、一曰、表は無紋の綾、うらは国紬、二曰、表は国紬の長浜染、裏は示太山絹、三曰、奥紬の小袖、両面無紋の黒、附たり紅梅の帯五條と云云。二百年になんくとして、その風すでにかくのごとし。近来酒店遊里次第にひろく、農をいとなむものは少く、そのうへ膏烟草ごとき無用のもの世にひろまる。是国家の貧しきもといなるべし。慶長十四年東照宮かつて烟草を禁じ給ふも、深く益なき事を察し給ひてなるべし。

## 謙を守れとの説

易の謙の卦は、艮の卦を下にし、坤の卦を上にする。




坤は地なり、艮は山なり。

山の地のうへに高く出たる、時として蹇崩るゝことあり。山地の下にかくれてその高きを示さず。坤は順にして、艮は止るなり。物に順ひとゞまるべき所にして、進むことをもとめずして止るゆへに、人のきらひ妬もなし。是謙の徳なり。謙はへりくだるといふ字にて、物に高ぶらず、吾をつゝしみ、奢らざるなり。故に易の象伝に、天道虧<sub>レ</sub>盈而益<sub>レ</sub>謙、地道變<sub>レ</sub>盈而流<sub>レ</sub>謙、鬼神害<sub>レ</sub>盈而福<sub>レ</sub>謙人道惡<sub>レ</sub>盈而好<sub>レ</sub>謙。仰で天を見れば、日高く昇れば昃き、月正に満れば虧。ふして地を覩れば、潮も満ればひき、水も流れて卑につく。鬼神造化のあとも、草木繁りては枯れ、人盛にしてはおとろふ。人情も奢恣なるものをばにくみ、へりくだり恭しきをば愛す。甲斐の信玄、板垣彌次郎が扇に、

謙もみよみつればやがてかく月の

いざよひの空や人の世の中

と。この歌をかきて賜しは、謙徳をつゝしめとなるべし。人の至つて貴きは天子なり。されども九五の位にます。易の乾の卦  下よりかぞへて五にいたる、是九五なり。是猶上に一爻をのこし、天の道をおそれみつつしみ給ふなり。故に易の上爻は、亢龍有<sub>レ</sub>悔とて、龍の天にのぼるがごとし。盡くのぼりつめたる時は下らねば適はぬゆゑに、始て悔

しく成たる也。是天子のみの事をいふにあらず。かりにたとへていふ也。一升入る器あり。一斗入器あり。一石入る器あり。一升入る器に九合いれ、一斗入る器に九升いれておく時は氣遣なし。一升入る器に一升、一斗入る器に一斗入る、時は、すこし障ても打こぼして、剩器さへ損ざすやうになりゆくもの也。ましてや一升入るものに二升もいれんとはかるをや。易の象に、亢龍有悔、盈不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>久也といへり。足利鹿苑義満は太上天皇とまでなりしも、誉る人はなし。秦の李斯といひし人は、上蔡と云所の人にして、博学にして多才なり。秦の始皇につかへ、位宰相となれり。されども、その心あくまでおそろしきものにて、書籍あれば人いろくの事をしりて、上のしおきをもいふ物なりどて、天下の書をあつめて焼すて、儒者をあつめ坑にいれうめ殺し、始皇崩じて、その太子扶蘇と、大将蒙恬などを殺て、扶蘇の弟胡亥を位につけ。二世皇帝と号し、民富ば謀反をするなどして、成敗きびしく、年貢つよく取立、督責の術とて民をなやましける。右いふごとくみちてはかくる習なれば、又趙高といふもの、讒にあひ、咸陽の市にてきられけるとき、その子にむかひ、故郷の上蔡にして犬をつれ兎かりせし貧しきむかしをくやみなげきしかど、夫さへかなはぬ身となり、一門従類ことごとくころされけり李斯忠をもちて君につかへ、民を憐み、世をすくはば、この後悔はあるまじ。是らも易の亢龍のいましめをしらざる也。人人その己が分といふことをしれば悔なし。子は子の分あり。臣は臣の分あり。たとひ天下に並なき忠をつくし孝をつくしたりとも、是臣となり子となるもの、分なり。吾こそ世にもかくれな

き忠孝をなしたりとて、それを鼻にかけ、親にほこり、君におごらんは、謙の道にたがひ、  
 忠臣孝子といふべからず。孔子謙の心を釈て、勞而不<sub>レ</sub>伐、有<sub>レ</sub>功而不<sub>レ</sub>徳、厚之至也との給  
 へり。手柄ありても、身に勞しても、我こそ人におごるの心なからんこそ徳のあつきな  
 れ。わが分をしらざるより。賤しくして高ぶり、貧くして富るを学び、一段づゝも吾おる  
 べきところよりさきへゝとすゝむ程に、藍縷きつるときは木綿布子も羨しかりしが、布  
 子にもあへば小袖きたくなり、夫より綾羅錦繡もかざりたくなる。歩行する時は馬も羨し  
 が、馬にのれば駕籠、駕籠より乗物輿と只管に高大になれる事、是を僭上といふ。約体な  
 くともいふべき歟。布子きるべきものは布子歩行すべきものはいつもかちと、分限の外を  
 したふべからず。高席につきたるは勿体ありてよきものゝ様なれども、親よりも一段上に  
 座したらんは、片腹いたくこそ有べけれ。みな謙の道をしらずして奢り恣なるよりこれ  
 り。八佾は天子の樂なるを、季氏もちひたりとて、孔子ふかく歎きたまひしも、その分を  
 しらざる故なり。家に貯ふべき道具も、我分限より過たらんは、却て恥べき事なり。唐の  
 文宗のときの相国王涯が娘、寶訓といひし人の妻となりけるが、かへりて父にいひけるは  
 玉の釵のきわめて細工手をつくせるあり、価七十万錢なりといひける。王涯きゝて、七十  
 万錢は我一月の俸給なれば、汝におしむにはあらねども、釵ひとつにして七十万といへば、  
 これ妖物なり、かならず禍と相隨んといへり。数月の後女又かへりて、員外郎馮球といふ  
 ものゝ妻もとめたりとかたりける。王涯きゝて、わづかに郎吏の妻として、首の飾七十万



ならば久しくあるべからずといひしが、はたして程なくその身も亡けり。頼家のとき、山門一揆をおこしける佐々木左衛門太郎重綱も討手にむかひけるが、父高綱法師これをおくり、重綱が武具の美しきを見て涙を流しける。高綱の兄入道維高、入道盛綱そのよしをとひければ武具の美なるは身に害あり、かれ兵をしらず、此度生てかへらじといひしが、はたして討死しける。討死はもとより武士の本意とはいひながら、武具の美なるは早く人の目にもつくものゆゑに、頼義もうつくしきを亡瑞の鎧とて、ふかくいましめ給へり。

### 善人悪人盛衰天寿の解

ある人問て曰、治れる世はすくなく、乱れる世は多く、悪人は多くさかへ善人はおとろへ、悪人は富、善人は貧しく、悪人は寿く、善人は天きがごときは如何。予こたへて曰、是説あり。善は陽の正しき也。悪は陰の邪気なり。陰陽は互に消長するものなり。夏さり冬来り、夜翌日晏るゝが如し。然どもあしき事は耳にいりて心にさかわず。目に見て心を悦しむ。人の君たるもの、すこしく防ぎ守るの心おこたれば、佞人きそひ進むものなり。佞人すゝめば親子夫婦の中をへだて、兄弟君臣の怨をなす。是みだれの階なり。佞人は計を廻しへつらひをなし、いかにもして君の心に適はんとたくむものなれば、現在悪人とはみへぬものなり。操狂言にすることく、悪人なりとて面あかく眼ふとく、かりそめにも方外なる事を声ありたけにさけびていふ物ならば、誰かこれに迷ふべき。悪人は智ふかく詞あ

まくして、たえてその気さきみへぬものなり。酒をのみ色をこのむがごとき、人間の至てたのしく面白きもの、是に過たるものなし、たとへばかくのごとし。終に身の讎となるは、後にぞおもひ合するものなり。いかなる発明の人もこゝに迷ざるはなし。むかし楚の平王の臣郤宛といふ人あり。正しき人にて、国人もあつくなつきけり。時に呉国より、掩餘燭庸などいふを大将として楚をせめけるに、呉の国内乱ありて君ころされけるゆへ、掩餘燭庸も皆よの国に出奔しける。此とき郤宛楚の大将として拒ぎ戦しが、此乱をきゝて人の乱に乗ずるは不祥なりとて、直に師を引入けり。平王の出頭に費無極といふもの有。郤宛をにくみ時の令尹子常にゆきていひけるは、郤宛何とぞ令尹を招き酒をすゝめ度由念頃に申候と云、又郤宛がかたに行て令尹この宅へきたり酒をのまんとなりといひければ、郤宛悦び、賤しき我宅へ令尹来らるべき事、身の面目此うへなし、さりながら何ぞ饗応のしなもなしといひけるを、費無極きゝて、命尹は武具を甚このめり、もし来らるゝ日は武具を門につらぬべし、令尹きたらばみるべし、時に是をとりて獻じられよといひ、さて其日に成ければ、郤宛かたの如くとりしつらひて待ける。無極いそぎ令尹にゆき色を変じ、さてく某君を誤んとせし、郤宛が門には武真森然と立ならべたり。是二心の色と見へたり、先達て呉の軍にも呉の賄をうけて一軍にも及ばずかへれり、いよく疑し、疑給はば人を使しに見給へと云ける。人を使してみせしむれば、太刀鉾弓箭無極がことばに違なくつらねたり。令尹大に怒、焼討にして郤宛をほろぼしける。慶長の頃、太閤秀吉薨じ給ひ、人ごゝ

ろもまだ静ならざりし時、五大老ありといへども、東照宮と加賀利家の右に出るものなし。石田三成、増田長盛とはかりて、この兩人心をあはせ給はば、吾輩志を得ることあるべからずとて、石田増田中よからぬ真似して、増田は神君におもねり、石田は利家にへつらひ隙をうかがひける。一日利家東照宮を招請あらんとて、東照宮も渡御あるべきにきわまりしに、増田来りて、利家はかりごとありゆき給ふべからずとて、しゐてとゞめ申けるゆへ、病に託しゆき給はず、増田又利家の宅にいたり、前つかたすこしあしくさゝへ候もの有つて事はたさず、この度招請あらば然るべきよし申にぞ、利家まへかたの事吾も心に恥る事あり、またく欺をうけば人にあふべき顔なしと申けるを、増田さきの事内府東照宮なりもふかく後悔し給ふ、この度まねき給はばかならずきたり給ふべしとなり。よつて招請の日定め、その日になりしかば、増田また東照宮にいたり、利家姦謀ありかならず往給ふべからずと、詞をつくしてとゞめけれども、東照宮このころも約にたがひ、心甚こゝろよからず、再約に違ふべからずとて、已にいでんとし給ひけるを、増田偽りて書状をしたゞめしをふところより出し捧奉る。東照宮あやしみ給ひ、俄に故障有とて此日も延引遊しける。利家この事をふかく憤り給ひ、細川忠興をよび給ひわれ年老、人の為に侮られ候事かくの如し。一生の恥とこそおもひ候へ、路を足下の領分丹後にかり、加賀にかへるべしとの給ひしを、忠興きゝ給ひ、この恨は尤に候へども、今かくのごとくにして帰らば、世の人は怯つたなしといふ、威権もすたれ、秀吉の顧命にもそむき給ふにあらざやととゞめ給ひけるゆへ、増田がはか

りごとむなしくなりけり。よくく、姦人の心はにたるものなり。かくのごとく手を入あしを入するほどに、いかなる人をも迷し、一旦さかへるものなれども、夕立の漲り来るごとく、岸も堤もくづしもてゆく様なれども、只一時のことにして、費無極もころされ、増田石田もほろびたり。又正しき人は物にへつらはず、此方よりもとめては、立どころに富貴を得るといへどもせず、計をまうけて我身の快する事をせず、賄にふけらず、あしきをいさめたつほどに、あしき人の様に俄に災のもへ出る様の事はなし。物に憐ふかく、利にふけらず貧ものなり。又よき人は、いつ迄いきても人に愛せられあかぬゆへに、長いきしても猶おしまるゝなり。あしき人は、四十そこらにして死ても、人にうとみあき果られ、長生せしごとくおもはるゝなり。廿日日のてりたるは一日ともおもはず、三日雨の降たるは十日もふりたる心地するが如し。百年の歡樂は短かきに似て、一日の憂は長に似たり。一斗の水、一握の泥をいれるれば、その水ことごとく泥の如し。百人のうち五人七人の溢れものあれば、そのさとはことごとく溢るゝ様におもはるゝなり。よしもあしきも命はかぎり有ものなれば、よき人とてながいきすべきにもあらず。あしき人とて早く死すべきにもあらず。されども一度さかへ一度衰る内、善をつむ家はさかへ、悪をつむ家はおとろふ事多し。何の里何の国なりとも、鑑てしるべし。ある人の曰、此理かくのごとし、又あしき事はきゝやすくよき事はきゝがたきはいかに。予が曰、酒は口にあまくして病をかもし、色は心に快して人をつからず。朝寝する人は、など左は朝寝するとおこしたるは忠なれど、

ねたきときは入ざる事とおもふものなり。よし／＼ねよといふは諂也。されどねたき時はうれしきものなり。かゝるかりそめの事にだによき事は耳にさかふ。まして大事にのぞみてをや。よく／＼工夫なくんば、入ざる事とおもふべし。旁觀八目とて、是を隣の息の事になしてみよ。いかにひすかし囂なる人とも、早くおきよと云しが忠と思べし。

### 陰悪必ず禍を蒙るの説

憎ても憎むべき者は、なき事を造り云て、人に悪名をとらするもの、毒飼して人をころすもの、我は賢人のふりしてひそかに人を陥に入れ、又人をば毒飼し、己は長く世に生はたかり、榮耀し旨き事に逢んとは、さり逆は黒き心ばへなり。これよりみれば、或はさしちがへ、或は討はたすがごとき、その心に害なし。然ども天はたかきに居て卑をみる。その事蹟その禍を蒙ざるはなし。その罪牛裂すべし。

### 分別なき者におぢよとの説

太閤秀吉、御咄のもの伴内といふもの有。ある夜話の時、世の中に何物が至ておそろしきぞと問給ひけるに、皆上様ほどおそろしきはなしと云。伴内きゝて、いや／＼上様は正直にまし／＼とて、身に過なければ氣遣なし、世の中に無分別者ほどおそろしきものは候はず、無分別者は物の聞わけなく用捨をしらず、我儘をはたらき、理非の辨なければ、何か渠

が氣にあたり、いか成事をかいひやぶり、思はざる難をやなしなんと云ければ、太閤悦び感じ給ひしとなり。誠に世の中に理非のわかちしらぬもの程おそろしきはあらじ。物は理によりて服する様にありてこそその分もあれ、百姓の水論じけるをきしに、ひとりの男何やらんいひて、此事が目にはかゝらざるか、目は何の為のものなるやといひければ、我目は面の文なりと、すこしも負る色なし。かくいはんには肝心の理いはんとも、瓢単にて鯨おさゆる類なるべし。人食犬の様なるものなれば、僻事いはんとも除て通すべし。

### 忠臣国の為に命を惜みまた身をおしまずといふ話

趙の国の臣に、廉頗、藺相如といふ二人の臣あり。廉頗は手づよき大将にて、しばく戦数かつ。そのち秦の国より、いろくとして趙をとらんとしけれども、此二人ありてはかり難し。因て趙王に約して、澠池といふ処にて、秦王会しられけり。酒酣にして秦王趙王にこひて琴を奏する。趙王琴をひかれけると、秦の御史前んで、その年月その日、趙王にことをひかしむと書とめける。相如をとりて、秦王にすめうてと云ける。秦王いかつてうたず。相如進で甌をとり跪き、君もし甌を撃ずんば、五歩の内頸を血を以て大王をけがすべしと。左右のもの相如をころさんとしけるを、相如目を張して叱りければ、恐れてあとへしざりけり。秦王是非なく甌をうつ相如趙の御史をめし、その年月日、秦王に甌を撃しむと書せけり。秦の羣臣、趙の城十五を秦に獻ぜよといひければ、相如秦の都咸

陽を以て趙に獻ぜよと、始終酒宴おはるまで、一分の辱をうけずして国にかへりけり。この功により、その位廉頗が上に出けり。廉頗憤り、我軍の功を以て、彼が口さきの功名の下にたゝんこそ安からね、相如にあはばおもふさまに恥をあたゆべしとていかりけるを、相如きゝて、廉頗出る日は病と称し出ず。ある日途にて廉頗が来るをみて、車をかへして避匿けり。相如か臣等無念に思ひ、吾等親にわかれ妻子をすて君につかゆるは、君の人となりをしたひてなり、然るに廉頗にかくまで雑言せられ、おぢ恐るゝ事かくの如し、常式の者とてもかゝる恥辱は蒙らず、吾等もとより身不肖に候へば、いとまを賜りかへるべしと云ける。相如とゝめて、汝等廉頗と秦王はいかにぞと云はる。それは秦王勝れりと云。そのとき相如、秦王の威あるさへ我是を辱たり、われ怯しといふとも一人の廉頗恐るゝにはあらねども、秦我趙を攻ざるものは、我と廉頗と二人あるを以てなり、二人あらそはゞ一人は傷べし。然らば国の為にあらず、国の急難をすて、私の恨を快せんは忠臣にあらずと云ける。廉頗是を聞大に身をくひ、相如が家にゆき、涙を流し罪を謝し、是より刎頸の交をなし、趙の国おだやかなりし。朱雀院の馭宇、あやしき星出けり。天文博士是は大将の家の禍なるべしと勘がへける。時に小野宮實頼右大将にして、枇杷仲李左大将なり。小野宮右大将の家には是を禳ふとて、祈祷のしなくつくされけり。枇杷左大将の家には何事もなし。ある人其子細を問ひければ、左大将、星もし禍を大将の家に降さば、我と實頼となり、吾已に年老身不肖なり、實頼年壯に才あり、我もし禍を免るゝ事あらば、實頼に利

あらし、我皇家の為にこの人をおしむ、故に禳ずとかたられけり。蘭相如の国のために命をおしむ、是は国の為に身をおしませ。その君に忠ある所は一也。

### 医に望聞問切の四ツありといふ説

今人病をうけ、医師を招かば、明なる処にふし、委しく病の始末をととき、脈を察せしむべし。病人多くはくらき所にふし、病の様子もかたらず、唯脈ばかりによつて療治をもとむ。医者も名医とおもはれんとて、しか眩々にとはせず、古の神医も望聞問切の四を以てす。望とはそのいろを望み様子をさつし、聞とは声気にき、問とは病の次第をくわしくとひ、さて脈を切て薬をあたへしなり。今の医、神医に比せばその及ざる事千万億、その及ざる技を以て脈一いろにて病をわかたんは、決してこの理なし。病家も医に困なんぢさせんとならばよし。もし病をいやさんとならば、医に望聞問切をつくさしむべし。これ吾言にあらず。雲林の龔廷賢いへり。

### 医は仁の術といふ論

医は仁の術なり。しかれども医者をして仁の術を行ふものとはいふべからず。医道はちかくは身を護、遠くは人をすくふ。誠に仁の術なるべし。されども多くは書籍にあきりかなりといへども、身をまもるにはうとく、色にふけり酒に長じ、貧家の病を疎にし、富



人の治に心をつくす。いはんや、人、扁鵲が手なければ、誰か過なからん。過ときは人を破、甚ければ人をころす。百人を治して百人をいかすとも、百人はいくべきの理あるものをこそ活せ、死すべきものをいかすにあらざ。扁鵲が技を以てすら、吾よくいくるものをいかす、死せる人をいかすにあらざといへり。その壺人はいくべきものをころすなり。しからばその功と罪と、いづれかおもかるべき。されども是は医道の罪にあらざ。医を学も、過なり。故に医は仁の術といふべし。医者には仁の術を施者といふべからず。もし人あつて、吾万人治して万人を活すといふとも。我はまこと、せじ。死すべき人ならば、十人治して十人死すとも、医者之罪にあらざ。

### 美服珍膳世の弊を矯るの説

人激する事あれば、吾衣食の爲にせず、温飽の爲ならずといへり。是まことに男子の志ながらこれやすき事にあらざ。船に枕して馴ぬ旅寐の波にゆられる商賈、暑きより寒きにいたり、春より秋を凌ぎ、田に耕し畠に耘る徒はいふにたらず。馬に跨り刀をよこだへ、墨のころもに世を背るがごときも、十に七八衣食にはしる人ならずや。故に金もつものは利根ものど時めかれ、貧しきものはうるさしとあざけらる。誠に色に酒に、博奕放埒に家をやぶるもあれば、邪慾不道に富るもあり。貧福貴賤にては人の賢愚はさだむべからず。又衣服うるはしく着かざりては人にほこるの心あり。楚楚おろそかならんは、人に恥るの心あり。人

と交るにも膳に美味を羅ね、酒に飲をかさねて、是を親切といふ。是によつておもへば、吾輩たやすくごときもの、容易たやすくこしやすき関にあらず。もし衣服の美悪に心なく、又は吾したしき友ならんには、饗応の心つかひなく、麦をかしぎ菜を煮て、心のおく底もなくかたりあいな人は、誠の友なるべし。今はしらず。怨恨や、もすれば飲食の間におこるが故に、こゝに心を勞す。心を勞すればしばらくの会合も稀なり。稀なればしたしからず、あるひははじめよろしくもてなせども、終つがざればかへりて辱もとるなり。左いへばとて客をあしくあしらへといふにはあらず、是はしたしからん友の事なり。

### 米に譬へて五倫の道を喩す

米はおなじく米なれども、水を入れて炊くときには、飯となり粥となり、炊て是を醸すときは、酢となり酒となり、むなしく倉廩の下にすておけば、むしとなり土となる。醸して酢酒となり、捨て虫土となるものをみて、米にあらずといはゞ、人信とせんや。その同じき所の米、一度酒屋の手にいりて酒となる時は、その性熱し、血脉を通じ憂をわすれ、興を催しむ。又その糟を醸て、焼酒となすとき、その熱やくよりも烈しく、火を点ずれば油よりも猛なり。性大熱となり、よく人を傷る。又醸すときは美酒となり、その味蜜よりもあましく。酢となれば性温にしてよく収斂す。醴となるときは下戸の唇を潤し、ときに脾胃の氣をたすく。その本を尋れば米なり。ひとり米のみならず、一切のものしかなり。麻は直にのぶ

ものゆへに、蓬その中に生るときは自然とよくのぶものなり。蓬のみだれがはしき中にはえたらんには、生れつき直なるあさもはたいるならん。されば此の心を逍遙院の歌に、

まじりなば麻もかへりていかならむ、

心のまゝにしげるよもぎは

とよみ給へり。人もおなじく人ながら、その習ふ処の道により、いつとなくその心までおなじからずなりゆくものなり。今仏者は、儒を小なりとし、儒は仏を誕なりとおもひ、仏氏も宗派をたて、心をとく事同からず。儒者も門戸をたて、道をとく事同からず。おのゝその道にいるもの、其道におゐて発明す。ひとりこの事のみならず。盗人となり遊侠となり、あるひはかたましく、あるひはへつらひ、あるひは人をあざむきいつはり、その品いたつてかぞへがたしといへども、その本をとへばおなじく天をいだゞき地をふみ、父と母とありて生れざる人はなし。已に天をいたゞき地をふみ、父と母とありて生れたるよりしてみれば、父母兄弟則天倫といふものにて、この外に道なしとするべし。親と子とあるがゆへに、君と臣との礼あり。兄と弟とあるがゆへに、朋友の交あり。天をいたゞき地をふむゆゑに、夫婦の道あり。たとひ我となみは、士となり、農となり、商人職人とかはるとも、此外には出べからず、是より工夫するときは、道おのづからあきらかならん。酒にもあらず、酢にもあらず、米の米なる処をしるべし。米はよく人の命をのべ人をやしなひ、

害なきものなり。酒となり酢となりては。一時の味をきわむれども、本来の米には及がたし。人も人の道たらんは、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、夫夫たり、婦婦たるの間にあり。是本来の人の性なり。よくよく考べし。又その我このむ処によりて物をみる事も、米の酔酒と変ずるが如し。是を好む処におもねるといふ。たとへていはんに、月はおなじく大空にすむものなれども、船をうかべては水上の月とし、林下にやすらひては木間の月といひ、池に臨ばその影池にあり、露を弄ばその光つゆにとゞまるがごとし。ある人五倫の道を人にときて、兄は弟をいとおしみ、弟は兄をうやまへとおしへけるに、弟きゝてあれきゝ給へ、兄たらん人は弟をばいとおしむものにて候とて、我勝手よき事のみきゝ覚ける。又子路は、百里の外に米をおひ、父母を養し事をかたりければ、子路はことの外健なる男にてこそ有けめと云ける。又ある人の、かたわらにおもひものもちて、それを妻のしりて、事にふれてつれなきよしなどわびけるを、聖人の教にも妬あればさるとてさりける。誠に婦は物にあらそはず、妬ぎそはらんこそその道にもかなひなん。さしての事もなからんに、鬮ひすかしにかたかましきが、妾などありたるに、道なく妬んはにくむべし。さなきに我存分の僻事をはたらきて、婦人に聖人の道をのぞまんも、時宜によりてはおとなげなし。是等は酔酒むしつちを米と見、露にやどり溝にすむかげを月とおもふ類にして、わが心のわたくしにひかれ、我こゝろを公にせざる過なり。わが私、心にあらば、たとひ聖人のことばをきくとも、我わたくしをなすの媒なるべし。

施しをなしました施しを受けるの心得

人に施してはわすれがたきものなり。人のほどこしをうけたるはわすれやすきものなり。

- 「梅園叢書」（『梅園全集下巻』、名著刊行会、二〇一〇年十月五日、二刷）所収。
- 漢字は一部を除いて新字にあらためた
- PDF化には`LATEX 2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」。 <http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>